

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和52年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001205

昭和52年度

国立国語研究所年報

—29—

国立国語研究所

1978

刊 行 の こ と ば

ここに『国立国語研究所年報—29—』を刊行する。本書は、昭和52年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものである。

本年度の研究及び事業を進めるに当たっては、地方研究員をはじめ、各種委員会の委員、各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得た。また、調査について、各地の県及び市町村教育委員会、学校、幼稚園、図書館等の諸機関の御配慮を仰いだ。巻頭に一言して、深謝の意を表する。

昭和53年6月

国立国語研究所長

林

大

目 次

刊行のことば

昭和52年度の調査研究のあらまし	1
昭和52年度刊行報告書の概要	10
現代語文法の記述的研究	15
現代語彙の概観的調査	17
敬語の社会的研究	19
現代語の表現の文体論的研究	25
所属集団の差異による言語行動の比較研究	27
言語行動様式の分析のための基礎的研究	29
発音過程に関する研究	31
方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究	32
明治初期における漢語の研究	36
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究	38
高校教科書の用語・用字調査	41
現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究	44
文字・表記の体系的記述のための基礎的研究	46
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	48
日本語の対照言語学的研究	50
日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究	55
日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究	57
日本語教育の内容と方法についての調査研究	59
日本語教育のための研修に関する調査研究	61
日本語教育教材開発のための調査研究	62
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	63
文部省科学研究費補助金による研究	72

日本語教育研修の実施	89
日本語教育教材および教授資料の作成	101
国語辞典編集準備委員会	105
図書の収集と整理	107
庶務報告	108

昭和52年度の調査研究のあらまし

研究所の機構は次のとおり（53年3月31日現在）。



本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

言語体系研究部

① 現代語文法の記述的研究 第一研究室

現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。本年度は、主として、前年度語形によって分類した動詞のカードによって、ボイスに関する分析をおこない、また、前年度からひきつづきあつめた副詞のカードによって、陳述副詞の用法の分析をはじめた。(15ページ参照)

② 現代語彙の概観的調査 第二研究室

近代になってどのような語がふえたか、という調査を継続。基本的な動詞、形容詞について、その格支配を中心とする用法の記述に着手。学術用語が基本語彙からどの程度へただっているか、という観点から、日本語と英語とを比較した。(17ページ参照)

言語行動研究部

③ 敬語の社会的研究 第一研究室

契約社会・利益社会とよばれる企業社会の中で、敬語がどう意識され、使われているかについて、その実態を把握することが目的である。本年度は、関西地方の企業（日立製作所大阪営業所、同多賀工場京都分工場その他）を対象に、アンケート調査、面接調査、事務室内電話録音調査を実施し、あわせて、工場付属の社宅住民、小規模店舗の従業員を対象に面接調査を行った。調査後、それぞれの結果の整理・集計作業を進めた。

(19ページ参照)

④ 現代語の表現の文体論的研究 第一研究室

日本語の表現力を見きわめ、新しいレトリック理論を考える目的で、二つのことを行った。一つは関連文献からの情報集め、一つは比喩表現に内容面の考察を加えるための用例補充作業である。(25ページ参照)

⑤ 所属集団の差異による言語行動の比較研究 第二研究室

昭和47年度に岡崎市で、昭和49年度に東京都区内・大阪市で行った、二つの社会言語学的調査の資料の整理・集計、一部の分析を行った。その一

部は学会などで発表した。(27ページ参照)

- (6) 言語行動様式の分析のための基礎的研究 第二研究室

前年度および本年度、大阪地区で収集した数グループの録音資料の文字化(片カナ文節分かち書き)作業を終えた。この資料をもとに、文字化の方式および非言語的行動の記述の枠組みについての検討を行った。

(29ページ参照)

- (7) 発音過程に関する研究 第三研究室

現代日本語の音声を調音的、音響的、機能的な側面から明らかにするために、前年度にひきつづき歯茎音を調音するさいの声道のうごきを、主にX線映画資料の計測によって分析をすすめたほか、次の報告書を刊行した。
『X線映画資料による母音の発音の研究——フォネーム研究序説——』
(報告60)(10・31ページ参照)

言語変化研究部

- (8) 方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究 第一研究室

方言における音韻・文法の諸特徴について臨地調査を行い、その全国的地域差を明らかにする。本年度は、5か年計画の第1年次として、全国的準備調査を実施した。(32ページ参照)

- (9) 明治初期における漢語の研究 第二研究室

明治初期の翻訳小説『欧州奇事花柳春話』(漢文直訳体)と『通俗花柳春話』(和文体)との漢語について比較考察するため、対応語の調査を完了し、対応語一覧表と用例集の作成に着手した。東京日日新聞の用語・用字調査は前年度までに行った明治、大正、昭和の30年代までの分につづき昭和40年代の語彙表作成を完了し、昭和10, 20, 30年の語表記カードを作成した。また、近代語研究資料の調査を行った。(36ページ参照)

言語教育研究部

- (10) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 第一研究室

幼児・児童における母国語の習得過程、および言語の習得と幼児・児童の人間の諸能力の発達との関係を明らかにするため、前年度に続き、<大

小、高低、前後＞などの関係を取りあげ、それらの関係を表す語の意味理解と認知発達に関する実験を行った。また、3歳児の言語および学習行動に関する録音および観察を継続した。(38ページ参照)

言語計量研究部

- (11) 高校教科書の用語・用字調査 第一、二、三研究室

国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高等学校の社会科・理科の教科書を対象として調査・分析を行うものである。本年度は第4年次で、すでに計算機に入力されているデータ(約60万語)の検査と修正処理を中心に作業を進めた。(41ページ参照)

- (12) 現代表記の多様性の実態と表記意識に関する研究 第二研究室

現代語の表記のゆれや誤用について、それが、①どのような語に現れるか、②どのような要因でひきおこされるか、③どのような意識を専門家や一般国民がもっているかなどの観点から、それに対して、三年計画で調査研究を行っている。本年度は、第一年目として、①に関する基礎調査、②に関する実態調査を、国語辞典、雑誌、広報紙などを対象として行った。

(44ページ参照)

- (13) 文字・表記の体系的記述のための基礎的研究 第二研究室

現代語の文字体系・表記体系を記述するための基礎資料を整えるとともに、記述法の開発を目的とした実験的な研究を行っている。本年度は、新聞表記調査の語表記台帳作成のためのカード整理を行うとともに、漢字使用の量的構造、漢字の機能、表記行動のモデル化などのテーマについて、研究方法の検討と開発を進めた。(46ページ参照)

- (14) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 第三研究室

日本語を含む言語を理解する、人工頭脳に関するアルゴリズムの研究及び計算機シミュレーションのためのプログラムの開発を行い、併せて、モデル化の基礎となる言語の基礎的データの収集を行った。そのほか、日本語のコンピュータ処理を効果的に進める上で重要となる漢字入力装置開発に

関する機能分析，また用語用字調査の処理効率をはかるためのシステム及びソフトウェアの技術面からの基礎的研究と実験を行った。

(48ページ参照)

日本語教育センター

(15) 日本語の対照言語学的研究 第一研究室

外国人に対する日本語教育の基礎となる日本語の対照言語学的研究の方法論を確立し，それに基づく個別言語との具体的な対照研究を展開しようとするもので，「対照文法記述のための概観的研究」，「日独語の対照言語学的研究」の二つを具体的な課題として研究を進めた。(50ページ参照)

(16) 日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究 第一研究室

日本人の言語行動様式の類型—ことばを中心とするコミュニケーションパターン—の体系づくりを目指す研究である。言語行動の具体例をテレビ，ラジオの放送番組，実際の生活場面の中から録画，録音によって採集し，分析整理してきたが，それとともに外国人助言者との共同研究を通して，外国人の言語行動習慣との比較も行い，日本人の言語行動様式の類型と特性を求めてきた。本年度は資料収集を継続して行い，分析整理段階の作業に着手した。(55ページ参照)

(17) 日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究 第一研究室

本研究は外国人学習者が学習すべき一般的，基本的な日本語の語彙の目安を立てることを目的とし，日本語教育ならびに国語学，言語学の専門家22人に委嘱し，『分類語彙表』(資料集6)に収録された約4万語の一語一語について基本度の判定を行い，その結果を集計することによって基本語彙表を作成しようとするものである。本年度は3年計画の第3年次にあたり，上記判定結果を電子計算機を用いて集計し，一致度の高いものから順に上位2千語，6千語を選び基本語彙第一次集計資料を作成した。

(57ページ参照)

(18) 日本語教育の内容と方法についての調査研究 第一研究室

教育目的別による日本語教育の内容，方法上の問題点を明確にし，そこ

から日本語教育研究上の方法論と具体策を探求しようとするもので、本年度も年少者教育を対象とし、それぞれの機関の日本語教育実務に携わっている担当者の代表を集めた研究連絡協議会を設け、各機関の日本語教育の現状ならびに問題点を聴取した。(59ページ参照)

(19) 日本語教育のための研修に関する調査研究 日本語教育研修室

日本語教員の資質向上をめざして、効果的な研修を行うためには、教授に必要な教育内容の明確化、教授資料、教材等の整備充実、また研修受講者の能力、専門、受講期間等に応じた研修制度のあり方、カリキュラムの設定など綿密な分析、検討、準備のもとに実施する必要がある。そのために研修実施のためのパイロットプログラムの開発と、研修を要望する日本語教育社会の実態の調査を開始した。(61ページ参照)

(20) 日本語教育教材開発のための調査研究 日本語教育教材開発室

既存初級教科書における語彙・構文について種々の観点から、教材特に視聴覚教材の素材となるべきものを調査・整理した。(62ページ参照)

(21) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 文献調査室

例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し、情報の収集整理を行った。(63ページ参照)

なお、上記の研究のほかに、文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

特定研究（２）談話行動の実験社会言語学的研究（代表 渡辺友左）

東京下町地区および大阪中河内地区で座談場面の録音・録画資料を収集し、第一次文字化（片カナ文節分から書き）作業を終了した。分析方法および分析例などを『研究報告集1』（報告62）に発表した。(72ページ参照)

特定研究（２）日本語教育のための基本的な言語能力の測定に関する研究
(代表 野元菊雄)

この研究は外国人に日本語を効果的に習得させるための到達目標を明らかにすることを目的としたもので、その客観的な基準を実際の言語運用面につ

いて具体的な実態調査によって確立しようとするものである。このため、本年度は、東京および大阪において留学生などの日本語学習上の多くが接すると思われる日本人の知識階層を中心として、その日常生活における発話資料を収集し、その分析を始めた。(74ページ参照)

特定研究(2) 児童の概念形成過程における言語の役割とその教育効果に関する研究(代表 林 大)

児童の概念形成過程は言語の習得過程と密接な相互交渉的な関係をもつ。そこで、言語形成期にある児童について、必要な概念形成の過程と言語のかかわりを発達の、継続的に追跡調査する必要がある、(1)児童が母子の言語交渉の中でどのような概念を表す語彙をどのような意味用法で使用するかを調べる「言語使用調査」、(2)範疇語、日常概念語の意味をどのように把握しているかを調べる「語彙理解テスト」、(3)児童の書く作文や、幼児向け絵本には、どのような概念を表す語彙がどのように使用されているかを調べる「作文、絵本調査」を実施した。(78ページ参照)

総合研究(A) 表現法の全国的調査研究(代表 飯豊毅一)

表現法の全国的・地域差を明らかにするために、全国各地の方言研究者を分担者・協力者とし、共通の調査票により、全国的準備調査を実施した。

(81ページ参照)

一般研究(A) 幼児・低学年児童の語彙調査(代表 芦沢 節)

戦後の社会生活および文化的生活様式の変化により、幼児や低学年児童の習得する語彙量や語彙内容は大きく変容していると思われる。本調査はその実態や特色をできるだけ客観的にさぐろうとするものである。本年度は3年計画の第二年次にあたり、特定幼児8名(5歳児)について、語彙使用調査、24時間語彙調査、語彙連想調査、言語生活アンケート調査を実施、また小学校児童200名について、語彙連想調査および言語生活アンケート調査を実施した。(84ページ参照)

一般研究(A) 現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究

(代表 斎賀秀夫)

現代語の表記における、漢字使用の実態と使い分けの意識を調査し、漢字の使い分けなどの表記に関する個人差を分析した。また、それとともに、従来の漢字調査、語彙調査のデータから得られる諸情報を用いて、種々の漢字かなまじり文をコンピュータによって出力する実験を行った。

(85ページ参照)

一般研究（B）雑誌用語の変遷に関する研究（代表 宮島達夫）

近代における用語・用字・文体などの変遷、特に戦後の国語改革がこれにおよぼした影響を知るため、雑誌『中央公論』からサンプリングによって資料をぬきだして調査する。本年度は1906年から1976年まで10年おきに8年分のデータ（各年1万語）をぬきだして、採集カードをつくり、2、3の年については採集・集計をした。(87ページ参照)

昭和52年度刊行報告書の概要

X線映画資料による母音の発音の研究—フォネーム研究序説—（報告60）

現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴などを主にX線映画資料によって検討する一連の研究のうち、単独の母音に関する部分を取りまとめたもので、以下の4章からなる。担当は上村幸雄（51年3月に琉球大学教授として転出）、高田正治。第1章「序章」は、現代の支配的な音韻論におけるフォネームの生成と認識に関する理論の根底にひそむ問題点を指摘し、また、この研究における方法論についてのべた。第2章「母音の調音の生理学的基礎」は、はじめに母音にとって唯一の音源となっている声帯の機能を、声帯筋の制御、呼吸筋の制御、声道の形状の制御とこれらの相互関係及び時間的変化として解説し、つぎに、音響管としての声道の形成に関与する各種音声器官が、解剖学的な拘束のもとで母音調音のためにどのように機能しているかをのべ、最後に、休止状態にある声道、発話の準備状態にある声道、中立的な母音調音時における声道の特徴について言及した。第3章「声道による母音の調音の可能性—D. Jones の基本母音についての検討—」は、D. Jones が提案し、広く実用化されている基本母音の正当性、実用性についての検討を、上村の発音による基本母音のX線映画資料からえられた結果、及びドイツ語、ロシア語などの母音についての同様な情報（他の研究者による）によって行い、修正すべき点を指摘した。第4章「日本語の5母音」では、フォネームの音韻論の基礎を明らかにするために第1に必要な、context に依存しない単独の母音を対象をしぼり、X線映画資料にもとづいて、そのような母音の「標準的な発音」のばあいの声道の特徴を5個の母音ごとに、また、各種音声器官ごとにのべ、その他、「誇張的な発音」、「よわまった発音」のばあいの5個の母音の声道の特徴についても言及した。巻末には付属資料として、単独の標準的な5母音の発音時における声道各部のうごきの時系列分布図、映画のテキストなどを収めた。

電子計算機による国語研究IX（報告61）

○土屋信一「高校教科書の同語異語判別システム」（1～16ページ）

語彙調査において最も重要な作業である同語異語判別についての論述である。これまでの判別作業を概観し、高校教科書の語彙調査における計算機を用いた判別作業の報告、今後の方向について述べた。

○中野洋「言語処理における一貫処理法の研究」（17～40ページ）

電子計算機による言語の自動処理プログラムの報告である。分かち書きされていない漢字かなまじり文を入力データとし、単位分割、漢字解読、品詞認定、意味情報付加を自動的にを行い、文脈つき用語索引を作成する。

○斎藤秀紀「多目的漢字入力システムの試案」（41～56ページ）

これまでの漢字データの入力・修正・盤外字処理・検査およびその操作性についての種々の問題点を解消し、多くの長所を持つ新しい入力システムの提案である。マイクロコンピュータの制御のもとに漢字鍵盤・ディスプレイ・フロッピーディスク等を用いる。

○田中卓史「人工知能のための言語分析—基礎的考察—」（57～69ページ）

言語情報処理のための新しい研究方法の提案である。自然言語を分析することによって人間の情報処理機構を明らかにし、機械処理システムに反映させる。概念のデータベースとその処理手続およびシステムについての基礎的な考察を行った。

○鶴岡昭夫「『～な』と『～の』について—漱石と鷗外の場合—」（70～101ページ）

電子計算機によって作成した文脈つき用語索引を資料とした研究である。「～な」と「～の」のゆれについて、漱石と鷗外の間での用法の違い、その量的実態等を明らかにした。付録として用例集をつけた。

○野村雅昭「接辞性字音語基の性格」（102～138ページ）

筆者の語構成についての一連の研究の一つである。接辞性字音語基に関して、量的側面、用法を明らかにし、その種類と機能について論述した。

研究報告（１）（報告62）

1 高橋太郎「「も」によるとりたて形の記述的研究」（1～52ページ）

文学作品・論説文などの資料をもとに、「も」によるとりたて形の、かたちづくり、意味、機能を記述、分析したものである。

2 宮島達夫・高木翠「雑誌九十種資料の漢語表記」（53～104ページ）

現代雑誌九十種の用語用字を資料として、漢語かながきの問題を調査、分析した結果の報告である。また、新聞の漢語かながきを調査し、雑誌との比較を行った。

3 江川清「談話行動の実験社会言語学的研究」（105～116ページ）

4 江川清「身ぶりの記述について」（117～126ページ）

5 杉戸清樹「身振りを記録する」（127～150ページ）

6 米田正人「談話行動の計量的研究について」（151～154ページ）

3～6の四編の論文は、談話行動の実験社会言語学的研究に関するものである。3はこの研究の目的と資料収集方法の概要を述べ、一部の文字化資料を添えた。4は「行動の文字化」とでも言うべき記述方式の試案について述べたものである。5は身ぶりを身体各部位の動きとしてとらえ、4より細部にわたる行動記述の方式について述べたものである。6は発話時間：発話回数などについての計量的分析について述べたものである。

7 佐藤亮一、真田信治、沢木幹栄「表現法の調査方法について」

(155～197ページ)

表現法の全国的調査を実施する際の調査のあり方についての研究のうち、待遇表現調査における場面の設定に関する問題について述べ、さらに、格助詞項目の調査における「標準語翻訳式」「語形選択式」「対訳式」の比較結果を報告したものである。

8 飛田良文「明治初期東京人の階層と語種との関係」（198～230ページ）

『安愚楽鍋』にあらわれる話しことばを対象として、身分・職業・性の異なる登場人物ごとの使用語彙表を作成し、語種の面からの明治初年の言語位相について述べたものである。

方言談話資料（１）—山形・群馬・長野—（資料集10）

言語変化研究部（第一研究室）は、昭和49年から3か年計画で「各地方言資料の収集および文字化」を実施した。この研究は、現今急速に失われつつある全国各地の方言を生のままに記録（録音・文字化 標準語訳および注付）集成し、国語研究の基礎的な資料とすることを目的として、当研究所地方研究員の協力を得つつ進められたものである。本書は、昭和50年度に（全国23の府県から各1地点を選定して）実施した老年層話者による会話資料のうちの「山形」「群馬」「長野」の地点分について刊行したものである（注）。

本書に収めた地点名と収録・文字化の担当者および収録内容は、次の通り。

I 山形県西村山郡河北町谷地

収録・文字化担当者 矢作春樹

収録内容 1) 冬の薬仕事 2) 冬の水汲み 3) 山仕事 4) 叔母さんの卒倒 5) 萱野刈り 6) 肥やし金と給金 7) 蚕の収入 8) 草履作りと小遣い 9) 子守り 10) 手足による農作業 11) 旅行 12) 植樹と日照権 13) 都市計画と移転 14) 田螺と鯉 15) 小正月の行事 16) 田楽焼き

II 群馬県利根郡利根村大字追貝

収録・文字化担当者（協力者） 上野勇（杉村孝夫）

収録内容 1) 雨乞と天気祭 2) 壮健芝居 3) 干草刈り 4) 薬 5) 昔の商店 6) 昔の菓子・飴売りのおばあさん 7) 病氣見舞の品物 8) 出稼 9) 荷の運搬と牛の扱い 10) 狼 11) 配給と兵役

III 長野県上伊那郡中川村大字葛島

収録・文字化担当者 馬瀬良雄

収録内容 1) 稿手本の話 2) 幼いころの遊び 3) 昔の嫁入り
なお、この方言談話資料は、今後、順次刊行していく予定である。

（注） 本書の編集担当者は飯豊穀一・佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄・白沢宏枝であり、この研究企画には、以上のほか徳川宗賢（現大阪大学教授）が参加した。

日本語の文法（上）（日本語教育指導参考書4）

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている人たちの指導上の参考に供するもので、さきに文化庁編として刊行されている「音声と音声教育」「待遇表現」「日本語教授法の諸問題」の3冊に続く第4冊として、『日本語の文法（上）』の執筆を、大阪外国語大学教授寺村秀夫氏に依頼した。

外国語として日本語を学ぼうとする人たちに日本語を教え、それらの人たちの数々の疑問に答えるためには、教師自身が、日本語の仕組みがどうなっているのか、どういうきまりに従って文が組み立てられるのかを、意識的にしかもできるだけ体系的に把握しておくことが必要である。本書はそのために執筆されたものである。

本書は、一般の文法概説書の記述とは異なり、まず、文法上の主要な問題点を「問」の形で設定し、読者が考えながら読み進んでいくうちに「問」の問題点が説明され、自然に答が出てくるようになっている。更に随所に日本語教授者が文法を教える際のポイントともなる外国人学習者のおちいりやすい誤用例も挙げられており、とかく難解と思われがちな日本語文法の問題点を的確に把握するように考慮されている。また主要な文法学者の見解や外国語文法との相異点なども呈示しつつその問題点を明らかにするなかで著者の鋭い観察と見解が示されていることも本書の特色となっている。

『日本語の文法(上)』においては、基礎的な問題点を把握することに力点がおかれており、来年度刊行される予定の『日本語の文法(下)』には、「単文」が連なって大きな文を作る際に起こる問題点についてまとめられる予定である。

現代語文法の記述的研究

A 目的と内容

現代日本語文法の体系的な記述を目的とし、実際に使用された言語作品を資料として、それをカード化して分析するものである。本年度も、昨年度にひきつづき、次の三つの題目の研究をすすめるとともに、文献カードの補充(d)を行った。

- a) 動詞の形態論的な分析
- b) 陳述副詞の用法の分析
- c) コソアドの用法の分析
- d) 文法に関する研究文献カードの作成

B 担 当 者

言語体系研究部第一研究室

室長 高橋太郎 a, c 研究員 工藤浩 b, d 研究補助員 鈴木美都代 a, b, c, d

aは高橋が、bは工藤が分析を担当し、それぞれについて鈴木がこれを助けた。cは高橋と鈴木が、dは工藤と鈴木がそれぞれ共同で担当した。

C 本年度の作業

(1) aでは、昨年度語形によって分類した動詞の使用例のうちの、ボイスに関するカード約2万枚を能動、受動、使役、可能、相互などにわけ、能動と受動からその用法分類をはじめた。なお、これに関連して高橋は、「も」によってとりたてられた語形について『研究報告集(1)』(報告62)に発表した。

(2) bでは、まず、16の文学作品から約7万5千の副詞・副詞相当語句の用

例カードをあつめた。また、昨年度までにあつめた約3万の副詞用例カードをもとに、用例数の多い基本的な陳述副詞から、用法分析をはじめた。

(3) 昨年度にひきつづき、直接的な用法の分析を行った。今年度は、とくに、コノ・コンナ・コウシタ（ソノ……，アノ……）など連体的なものの分析を行った。

(4) dでは、本年度は、『国語年鑑』（国立国語研究所）、『文学・哲学・史学文献目録VI(国語学編)』（日本学会議）をもとにして、①1945～1973の論文集・講座ものに収録された文法関係論文（1974～1976は、昨年度作成済み）、②1945～1952、1974～1976の雑誌収録の文法関係論文（1953～1973は一昨年度作成済み）、の文献カードを作成した。これにより、過去二年間にすませた分とあわせて、1945年から1976年まで戦後31年間に公刊された文法関係論文の文献カードが、ひとつおりの作成されたことになる。これらの著者別分類は終了したが、内容別分類は進行中である。

D 今後の予定

aについては、本年度ボイスの分析をおわって、やりもらいにうつる予定である。

bについては、本年度補充した用例カードの第一次分類を早急に終えて、陳述副詞の用法分析をすすめる予定である。

cについては、来年度は、文脈的な用法の分析を行う予定である。

現代語彙の概観的調査

A 目的と内容

現代日本語の語彙体系を、いろいろな観点から調査記述することを目的とする。本年度は、次の五つの仕事を行った。このうち、b, d, eは前年度からの継続であり、a, cは今年度はじめたものである。

- a) 雑誌用語の変遷に関する研究
- b) 現代語彙成立過程の調査
- c) 基本語の用法の記述
- d) 専門語の調査
- e) 雑誌九十種の語表記の調査

B 担当者

言語体系研究部第二研究室

室長 宮島達夫 a, b, d, e 研究員 村木新次郎 a, c 高木翠 a, e

C 本年度の作業

- (1) aについては、科学研究費補助金による研究なので、別項(87ページ)で
のべる。
- (2) bでは、阪本一郎『教育基本語彙』の約24,900語中、『日本国語大辞典』
に明治以前の用例がのっておらず、明治以後の新語である可能性のあるもの
約8,100語に、『日本国語大辞典』にのっている初出文献を記入した。ただし、
まだ検査をしていない。
- (3) 現代日本語の使用例として『年鑑代表シナリオ集』(1971~1976)にのっ
ている約30の作品から、動詞・形容詞・形容動詞の用例をぬきだした。また、

記述の方法をもとめて、外国語の格支配辞典（たとえば、Kleines Valenzlexikon deutscher Verben——西ドイツ, Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben——東ドイツ, など）を検討した。

(4) dでは、学術用語が日常語からどの程度へだたっているか、という観点から日本語と英語とを比較した。学術用語集の数学・物理学・化学・電気工学・機械工学・航空工学・建築学・動物学・植物学・歯学の10分野から、それぞれ100語ずつをえらび、日英の基本的な語彙との関連をみた。その結果、すべての分野で、日本語の方が英語よりもそれぞれの基本的な語彙からとおいことがわかった。

(5) eでは、漢語についての報告を『研究報告集1』（報告62）に発表し、和語・外来語についての調査をつづけた。

D 今後の予定

aでは、予定した8年分の雑誌からの標本採集をおわらせる。bでは、記入した初出文献の検査をする。cでは、用例採集をつづけながら、基本的な動詞・形容詞について、その格支配を中心に、さまざまな用法を形態統辞論の立場と意味論の立場から記述する。dでは、専門的な文献から、専門語辞典でも一般の国語辞典でも見出しとしてとりあげていないような用語を採集する。eでは、和語・外来語の調査をつづける。

敬語の社会的研究

A 目 的

敬語がどのように意識され、使用されているかについて、これまでほとんど扱われてこなかったいわゆる契約・利益社会（当面、一般私企業）を対象にして実態調査を行う。この際に、社会言語学的な観点として、次の二点に特に注目する。

1. 敬語意識、敬語使用に関わる要因として、これまで地域社会では、性、年齢、社会的階層、職業、学歴などが重要であることが明らかになってきているが、契約・利益社会では、何がどのように関与しているか。
2. 契約・利益社会と、その成立基盤・背景としての地域社会との間の言語上の関連はどのようなものか。後者は、どのように、またどの程度、前者のいわゆる言語的後背地であるのか。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長 渡辺友左 室長 中村 明 研究員 杉戸清樹 研究補助員
塚田実知代

企業内面接調査実施には、言語体系研究部第二研究室的の宮島達夫が参加・協力した。また企業内および社宅内面接調査実施には、東京外国語大学学生安井清孝、青山学院大学卒業生芝山裕子の協力を得た。

なお、小規模店舗内面接調査は、大阪外国語大学教授吉田弥寿夫氏の紹介により、稲葉先春園茶舗、中川伊兵衛商店、渋谷利兵衛商店（いずれも大阪市内）、また、企業内各種調査は、株式会社日立製作所大阪営業所、大阪商品営業所、多賀工場京都分工場の厚意によって実施することができた。記して謝意をあらわしたい。

C 本年度の作業

I. 「A 目的」で示した観点1について、50年度は東京都内にある2企業の本社管理事務部門の社員を対象に（『年報27』参照）、51年度は茨城県にある生産工場2か所の事務系、現場系社員を対象に（『年報28』参照）、それぞれ調査を実施した。本年度は、株式会社日立製作所の下記3事業所を対象にして、これまで対象とならなかった営業部門の社員を含めて調査を実施した。具体的には、

- a 日立製作所・大阪営業所（大阪市）
- b 日立製作所・大阪商品営業所（大阪市）
- c 日立製作所・多賀工場京都分工場（家電関係・京都府乙訓郡）

の、管理事務部門、営業部門、現場部門の社員を対象に、以下の3種類の調査を行った。

1. アンケート調査

規模・対象

回答者総数 90名

a・b 両営業所：管理事務部門（経理部、総務部）、営業部門（産業機電部） 計42名

c 工場：事務部門（総務課）、現場部門（設計課、製作課）
計48名

アンケート内容

イ. 回答者の : 性別, 生年, 出身地などのほか, 所属部課, 職階, 諸属性 所属経歴なども含めた。

ロ. 敬語習得: いづごろ敬語を身につけたと思うか/育った家庭の言語的環境

ハ. 敬語意識: ことば使いへの留意度/ことばのどんな面に留意するか/職場敬語の現状への意識/職場敬語の将来への意見/職階, 年齢, 在社歴などの要因をど

のように意識するか

- ニ. 敬語使用：どんな言語形式を敬語と考えるか／「お」の使い方／「ワカッタ。スグ行く」の表現／「回覧が回ッテイルガ見タカ」の表現／朝のあいさつ（随伴動作も含む）／呼びかけの表現
- ホ. 書き言葉で：電話連絡のメモを具体的に作ってもらい、あて名、の敬語使用 署名、日付、一人称、二人称、三人称の待遇表現など十数項目に注目する。
- ヘ. 職場内での：職場内で、関西方言（「ソヤサカイ」、「ソヤカテ」、関西方言の「ワカラシマヘンネン」、「～サシテモライマス」、使用「～ハリマス」）を使うか、使わないか、またどう使か。
- ト. 職場内での：職場内で、茨城（北関東）方言（「～ッペ」、「ケ茨城方言の^{*}ンド」、「来レバ」、「シレバ」）を使うか、聞いた使用ことはあるか。（この項はc工場のみ。）
- チ. 職場意識：ゲゼルシャフトと規定される企業がどこまでそうなのか、ゲマインシャフト性はどの程度存在するか、などを求めて社会学の立場から。

2. 面接調査

規模・対象

上記アンケートへの回答者から、直属・直轄の上司・部下の階層構成に留意しつつ抽出した総計45名（a営業所 26名、c工場 19名）に個別面接した。可能なかぎり、各個人が属する課・係単位の組織構成員の全員（最高10人までと限って）を対象とした。

面接内容

- イ. どの人とどのぐらい話すか（公的、私的な会話量）。
- ロ. 呼びかけ表現（「課長」、「佐藤サン」、「田中クン」など）。
- ハ. 要求表現（「書類ヲotteクレ」）。

ニ．謙讓表現（「オ持チイタシマシヨウカ」）。

ホ．「行ク」の一人称，二人称表現。

ヘ．「来ル」の一人称，二人称表現。

ト．「居ル」の一人称，二人称，三人称表現。

チ．「～テイル」の二人称表現。

以上の項目について，各個人が，自分の属する組織の構成員ひとりひとりに対して（二人称），あるいはその人のことについて（三人称），それぞれどういう表現をとるかを質問した。

3. 事務室内電話実況録音調査

勤務中のより自然な会話を収録し，アンケート，面接調査の結果と比較し得る，ひとつの話し言葉資料を作成することを目標として，c工場の総務課事務室を対象に，ごく普通の勤務日2日間の始業時から終業時までの間に，同室備付けの電話（うち2台のみ）を通してなされる会話をすべて録音することを目指して実施した。

Ⅱ．「目的」の観点2については，対象とする企業を選定する際に，その企業（事業所）が成立する地域社会の方言敬語体系の特徴に注目した。50年度は東京語の敬語体系の行われる地域，51年度は敬語が稀薄（いわゆる無敬語地域）であるとされる北関東から茨城県日立市の企業を選んだ。本年度は前述のとおり大阪・京都の企業を選んだが，それはこの地域を日本語の方言区画上，今ひとつの有力な位置を占める関西方言領域の中心と考えからである。

このうち，51年度には日立市の地域社会について，はえぬきの住民および他府県からの移入住民を対象に面接調査を実施した（『年報28』参照）。本年度は，次の2種類の小規模な事例的調査を大阪市内，京都府下で実施した。

1. 大阪市内の小規模店舗での面接調査

関西地方はえぬきの少数の人によって経営・営業されている大阪市内の小規模な店舗（いわゆる老舗）で，その経営者，家族，従業員（3店

舗・14名)を対象に、仕事の上での敬語使用、敬語意識などについて個別面接調査を実施した。こうした店舗は、利益社会とはいえ、ゲマインシャフト的な性格を色濃く有しており、そこでの言語生活には、大企業よりもそれが強く反映されているであろうという、ひとつの仮説をたて、特に大阪方言の敬語形式がどのように用いられているかに注目しつつ、主たる調査である大企業内調査と比較・対照できるように、できるだけ共通した調査項目を設定した。

2. 京都府下の工場付属の社宅での面接調査

前掲c工場は、51年度に調査対象とした茨城県日立市の日立製作所多賀工場の分工場であり、従業員には、多賀本工場での勤務の経験者や、北関東、南東北地方の出身者が多い。この事実に着目して、アンケート調査の一項目(前述Ⅰ・1・トの項参照)で、回答者がかつて経験したか、あるいはその人の母語(母方言 Native Dialect)である茨城方言を、現在勤務している京都分工場でどのように用いており、意識しているかについて質問した。これとともに、同工場従業員用の社宅に住む従業員家族(特にその配偶者)のうち、北関東出身者ないし、茨城在住経験者計12名を選び、関西方言および茨城方言の使用、これらの方言意識、両方言の方言接触状況などを求めて、事例的に面接調査を実施した。

Ⅲ. 調査結果の整理

イ. 本年度実施したⅠ、Ⅱの各調査ののち、調査結果の整理、基礎的集計の作業に順次着手した。

アンケートへの回答はすべて数字コードに置換し、電子計算機用データカードに入力し、その検査を終了した。

企業内、小規模店舗、社宅での面接調査の結果は、対象個人ごとの回答形式一覧表、設問別回答形式カードなどの形に整理した。

事務室内電話録音は、文字化作業を完了した。

ロ. 50年度以降3年間にわたって継続実施した各種調査結果は、これまで順次、整理、中間的集計作業を施してきたが、予定した調査が今年

度で終了したので、これらを、対比的、総合的な観点から集計し分析する段階に作業を進めた。

アンケートについては、データカード入力済みのデータを磁気テープに置換し、各アイテム（各年度約200～260アイテム）毎の単純度数分布出力、職階別の各アイテム度数分布出力などを、電子計算機により試験的に実行しつつある。これにあわせて、データの最終的な検査、修正も進めている。

各種面接調査結果については、事業所別、職階別、語形別、話し相手別、出身地・経歴別などの観点から回答を整理し、表の形にまとめている。

D 今後の予定

次年度は、前項c・Ⅲの各種整理、集計作業を完了し、職場の差異、地域の差異などを考慮に入れて、各年度の調査結果を対比的・総合的に集計・分析する作業を進める。これらをまとめながら、全体的な調査結果報告書の原稿執筆を進める予定である。

現代語の表現の文体論的研究

A 目的・方法

この研究テーマは、広く日本語の表現力を確認し、記述するところに最終目標をおいている。研究全体の構想を略述すると、次のようになる。

- 1) 現代における文章観・文章批評の実態を調べるため、既刊の文献から関連情報を収集し、整理する。
- 2) 現実の言語作品から各種の表現手段を探索して 1) を補充する。
- 3) 両者を総合し、各技法の言語的性格と表現効果との対応を軸として整理することにより、現代レトリックを広く体系的にとらえる。

以上のうち、現代レトリックの全貌を大きくとらえること、および、その中の比喩表現の部分をくわしく扱うことの二点を当面の研究課題とする。

B 担 当 者

言語行動研究部 第一研究室

室長 中村 明 研究補助員 塚田実知代

C 本年度の経過

- 1) 文章表現・修辞学・文体論関係の既刊文献を収集し、そのうち31冊を通覧した。
- 2) 前年度末に刊行した『比喩表現の理論と分類』（報告57）は、比喩表現に関する理論的考察と、形態面を中心とした分析・分類を収めたものであるが、ついで比喩表現の内容面を中心とした分析・分類を行うためには大量の用例が必要なので、用例補充作業を進めた。本年度末までの進行状況は次のとおりである。

数字は作品数 A B Cは作品の重要さの段階 ()内は累積

採 集	127 (290)	A 27 B 98 C 2
抽出・点検	56 (163)	A 4 B 52
カード化	107 (107)	A 72 B 35

その結果、用例数の現在高は次のようになった。

既存カード	約16,000
追加カード	約 1,800
シナリオ・カード	約 700

なお、資料については『年報28』を参照。

D 今後の予定

- 1) ① C1)の文献資料の入手点数をふやし、関連分野の既知情報を収集・整理し、カード化する。
- ② 各種の言語作品からその他の表現手段を探索する。
- ③ ①と②を総合し、各技法の言語的につづきの表現効果との関連をとらえて、そこから新しいレトリック理論の構築を図る。
- 2) ① C2)の用例補充を継続実施する。
- ② 内容面の分析を行い、主として A. たとえる概念 B. たとえられる概念 C. 共通点 の3観点を軸に、トピックを考慮しつつイメージを中心に分類する。

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人々の言語行動は、その人が置かれている社会的諸状況に依存する面が大きい。性・年齢などの自然的生得的な変数を始めとし、血縁的（たとえば、家族）、地縁的（居住地）、社会的（階層や職業）あるいは心理的（仲間意識・パーソナリティ）などの条件が絡み合って、人々にあるタイプの言語行動をとらせていると考えられる。このことを中核として、種々の観点から社会言語学的な調査研究を行っている。

B 担 当 者

言語行動研究部 第二研究室

主任研究官 江川 清 研究員 米田正人 研究補助員 堀江よし子

この他、日本語教育センター長の野元菊雄（aおよびb）、広島大学の南不二男教授（b）、大阪樟蔭女子大学の杉藤美代子教授（b）の協力を得た。

C 本年度の研究

a) 愛知県岡崎市での敬語使用および敬語意識の調査——昭和47年度に文部省科学研究費を受けて実施した試験研究（1）「社会変化と言語生活の変容」（代表者 岩淵悦太郎）の調査結果につき、調査票の整理が本年度では完了し、全体の集計、分析に取り組む体制ができた。

b) 東京都および大阪市での言語生活の実態調査——昭和49年度に文部省科学研究費を受けて実施した総合研究（A）「大都市における言語生活の実態調査」（代表者 野元菊雄）の結果につき、本年度は、単純集計およびクロス集計作業を行った。なお、一部の結果を学会（9月2日、第5回日本行動計量学会、於岡山大学）で発表した。

D 今後の予定

a) 53年度中に報告書の原稿執筆を終える予定である。

b) 53年度中に集計作業を終え、報告書刊行への準備をすすめる。

以上の二つのテーマの集計は国立国語研究所の電子計算機(HITAC-8250)を用いて行った。

言語行動様式の分析のための基礎的研究

A 目 的

コミュニケーションとしての言語行動を総合的に把握するための基礎として、身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作りを主目的とする。合わせて、発話の分析やコミュニケーション・ネットワークの解明およびこれらの計量的分析のための方法論を検討する。

なお、行動の場面でも言語同様に性・年齢・職業などの社会言語学的変数が関与しており、地域差もみられる面が多いので、これらを統制した上で調査を行う。本研究は5年計画の第1年次である。

B 担 当 者

言語行動研究部 第二研究室

主任研究官 江川 清 研究員 米田正人 研究補助員 堀江よし子

言語行動研究部 第一研究室

研究員 杉戸清樹

この他、言語行動研究部長の渡辺友左、日本語教育センター研究員の日向茂男 および 金蘭短期大学の浜中武彦教授、大阪外国語大学の吉田弥寿夫教授、同倉谷直臣助教授、広島大学の南不二男教授、大阪樟蔭女子大学の杉藤美代子教授など多くの方々の協力を得た。

C 本年度の経過

1) 前年度に大阪市船場地区で録画・録音した資料の片カナ文節分かち書きレベルでの文字化を終えた。

2) 大阪府河内地区で数グループの録画・録音資料（ビデオ装置と録音器の併用）を得て、1) と同様の文字化作業を終えた。

3) 以上の資料をもとに、文字化の方式および非言語的行動の記述の枠組みについての検討を行った。本研究は始まったばかりであるので、まだ結果の報告を行う段階に至っていない。

D 今後の課題

さらに、資料の補充を続けるとともに、文字化方式や非言語的行動の記述枠組みについてのより詳細な検討を行う予定である。

発音過程に関する研究

A 目 的

現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴などを調音的、音響的、機能的な側面から明らかにすることを目的とする。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、または聴覚障害者、言語障害者の音声も取り扱いたい。

B 担 当 者

言語行動研究部 第三研究室

主任研究官 高田正治 (52.10.1)

C 本年度の研究

主として、前年度から引き続いて、標準語の種々の音声のうちで、とくに歯茎音を調音する際の音声器官の動きの分析を、X線映画フィルム像によって行った。その他、本研究の協同研究者であった前言語行動研究部第三研究室長 上村幸雄（現在、琉球大学教授）と共に、この一連の研究のうちの母音に関する部分についての検討をおえ、『X線映画資料による母音の発音の研究——フォネーム研究序説——』（報告60）を刊行した。

D 来年度の予定

来年度は、前年度中に未完におわった歯茎音について同様の計測、分析をすすめる。あわせて、X線映画の資料だけでは十分な解析ができなかったいくつかのフォネームを対象として、さらに、ダイナミックパラトグラフィによる予備的な実験的研究をはじめの予定である。

方言における音韻・文法の諸特徴に関する 全国的調査研究

A 目 的

方言における音韻・文法の諸特徴について臨地調査を行い、その全国的地域差を明らかにする。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

部長 飯豊毅一 室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 沢木幹栄

研究補助員 白沢宏枝

昭和52年度の地方研究員は次の各氏に委嘱し、各担当地域における調査を委託した。

担当地域	氏 名	所属機関<職>
北海道	五十嵐三郎	札幌大学<教授>
青 森	松本 宙	弘前学院大学<助教授>
岩 手	本堂 寛	岩手大学教育学部<教授>
宮 城	加藤 正信	東北大学文学部<助教授>
秋 田	井上 章	秋田大学教育学部<助教授>
山 形	矢作 春樹	寒河江市立陵南中学校<教諭>
福 島	三浦 芳夫	安積商業高等学校<講師>
茨 城	金沢 直人	茨城大学教育学部<教授>
栃 木	大橋 勝男	新潟大学教育学部<助教授>
群馬・埼玉	井上 史雄	東京外国語大学<助教授>
千 葉	加藤 信昭	千葉大学教育学部<教授>
東 京	大島 一郎	東京都立大学人文学部<助教授>
神奈川	斎藤義七郎	

新 潟	野口 幸雄	県立西新発田高等学校<教諭>
富 山	川本栄一郎	金沢大学教育学部<教授>
石 川	岩井 隆盛	金沢女子短期大学<教授>
福 井	佐藤 茂	福井大学教育学部<教授>
山 梨	清水 茂夫	山梨大学教育学部<教授>
長 野	馬瀬 良雄	信州大学人文学部<教授>
岐 阜	加藤 毅	岐阜大学教育学部附属中学校<教諭>
静 岡	中條 修	静岡大学教育学部<助教授>
愛 知	山口 幸洋	
三 重	廣濱 文雄	天理大学文学部<教授>
滋 賀	熊谷 直孝	県立彦根東高等学校<教諭>
京 都	佐藤 虎男	大阪教育大学<教授>
大 阪	山本 俊治	武庫川女子大学<教授>
兵 庫	和田 實	神戸大学教養部<教授>
奈 良	後藤 和彦	大妻女子大学<助教授>
和歌山	村内 英一	和歌山大学教育学部<教授>
鳥 取	今石 元久	鳥取大学教育学部<助教授>
島 根	広戸 惇	京都家政短期大学<教授>
岡 山	虫明吉治郎	県立玉野高等学校<教頭>
広 島	室山 敏昭	広島大学文学部<助教授>
山 口	岡野 信子	梅光女学院大学<助教授>
徳 島	遠藤 潤一	徳島大学教育学部<助教授>
香 川	近石 泰秋	県立図書館<館長>
愛 媛	江端 義夫	広島大学教育学部<講師>
高 知	土居 重俊	四国女子短大・四国女子大学<教授>
福 岡	奥村 三雄	九州大学文学部<助教授>
佐 賀	神部 宏泰	佐賀大学教育学部<教授>
長 崎	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部<教授>
熊 本	迫野 虔徳	熊本大学法文学部<助教授>
大 分	種 友明	大分大学教育学部<助教授>

宮 崎 日高貢一郎 N H K総合放送文化研究所<所員>

鹿児島 田尻 英三 鹿児島大学教育学部<助教授>

沖 縄 中松 竹雄 琉球大学教育学部<助教授>

以上の地方研究員のほか、荻野綱男（東京大学文学部助手）、木野田れい子（高知女子大学助教授）、佐藤稔（山形女子短期大学講師）、徳川宗賢（大阪大学文学部教授）、永瀬治郎（山梨県立女子短期大学助教授）、三石泰子（熊本短期大学講師）の各氏にも臨時に調査を委託した。また、国立国語研究所の担当者も全国主要地点で調査を行った。

C 本年度の調査研究

この研究は5か年計画（準備調査2か年、本調査3か年）とし、本年度はその第1年次にあたる。

本年度は、まず、当研究室で準備調査票の原案を作成し、9月20日から3日間、地方研究員代表者会議を開き、調査票の内容について具体的に検討した。その結果を踏まえて「方言文法の全国調査のための準備調査票」を作成し、地方研究員ほかの協力を得て、全国各地でこの調査票による調査を実施した。なお、この研究は、科学研究費補助金による研究「表現法の全国的調査研究」（別項参照）と相互に関連させつつ行った。調査項目総数は両研究を合わせてのべ約650、調査地点総数は、同じく、全国計170地点であった。

D 今後の予定

来年度は、本年度に実施した準備調査の結果を整理・分析し、調査項目を絞ってさらに準備調査を行い、本調査のための項目と質問法等を決定したい。54年度から56年度までを本調査の期間とし、最終的には、全国約千地点で臨地調査を行うことを目標としている。

E 実験的調査

上記の研究に関連して、現在の八丈島（東京都八丈町）において、標準語・

と方言が場面（対者）によってどのように使い分けられているか、その実態を世代別、あるいは、地区別にみることを目的として、実験的小調査を行った。内容は、三根・大賀郷・檜立・中之郷・末吉の各地区で、祖父・父・息子の3世代が健在な家族、各地区あたり5家族15人（八丈島全体で計75人）を話者を選び、音韻・語彙および文法を中心とする計60の項目のそれぞれについて、「祖父」「父」「息子」「孫」（のうちのいずれか2者）、および、「島出身の先生」「東京（都区内）から来た初対面の人」と話すときに使用する語形・表現についてたずねるものであった。調査は昭和53年2月に実施し、担当者全員が参加した。

なお、調査にあたって、加藤宣彦（東京都東久留米市立南中学校長、以前八丈島に勤務）、増田稔（八丈町立三原中学校長）、山田平右エ門（同町末吉中学校教頭）、石田賢児（同町大賀郷中学校長）、笹本邦治（同校教頭）の各氏のほか、島内各中学校の先生方のお世話になった。

明治初期における漢語の研究

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで、明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、さらに大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ、現代語成立の歴史的背景を明らかにする。

B 担当者

言語変化研究部第二研究室

室長 飛田良文 (1)～(3) 主任研究官 梶原滉太郎 (3)～(4) 研究補助員 中山典子 (1)～(4)

C これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度まで近代語研究室）では、昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の用語索引を作成し、48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集9）を刊行した。（『年報』21～27参照）。現在、明治初期の代表的翻訳小説『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の漢語について調査を行っている。

D 本年度の作業

(1) 『花柳春話』における漢語の研究

書き言葉における漢語の使用状態は、文体による相違が著しい。そこで、同一作品の翻訳で、同一訳者による、文体の異なる作品『欧州奇事花柳春

話』(漢文直訳体)と『通俗花柳春話』(和文体)の漢語について比較考察するため、漢文直訳体の漢語が和文体の訳文でどのような語あるいは語句と対応するかを調査した。本年度は、昨年度の二字漢語に引き続き、三字・四字漢語、それ以上の漢語の対応例を調査し、用例採集を完了した。また、これら対応例の分類と分析を行うため、対応語一覧表と用例集の作成に着手した。また、話し言葉における漢語の使用実態と比較するため、『安愚楽鍋』の人物別使用語彙表を作成し、その成果は『研究報告集1』(報告63)に報告した。

(2) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き漢語に関する研究文献を収集し目録に補充した。

(3) 近代語研究資料の調査

昭和53年3月22～24日にわたって、広島市立中央図書館蔵の浅野文庫(広島藩浅野家旧蔵書)の漢籍の句読点について調査を行った。担当は飛田良文・梶原滉太郎。調査にあたっては、司書井野博允、大谷美津子両氏のお世話になった。

(4) 東京日日新聞の用語・用字調査

前年度に引き続き、カードの点検および語彙表作成作業を行い、昭和42年11月10日の残りの分の語彙表を作成し、語彙表作成作業を完了した。次に、これまでに作成した語彙表とカードをもとにして、明治10年11月10、12、13日、明治20年11月10、11日、明治30年11月10日の6日分の語表記の実態(かな表記・漢字表記・漢字かな交り表記等)を表す語表記カードを作成した。

E 今後の予定

来年度は、本年度の作業を継続し、下記の作業を行う予定である。

(1) 『花柳春話』における漢語の研究は文体別の対応語一覧表および用例集を作成し、研究を完了する予定である。

(2) 東京日日新聞の用語・用字調査は、本年度に引き続き語表記カードを明治30年～昭和22年の分まで作成し、語表記の分析を行う。

(3) 近代語資料の調査を行う。

幼児・児童の認知発達と語の意味の 習得に関する調査研究

A 目 的

幼児・児童における母国語の習得過程，および言語の習得と幼児・児童の人間的能力の発達との関係を，科学的に明らかにすることは，言語の教育の上で，まず解明されなければならない基本的な課題である。従来も，これらの問題を志向して研究してきたが，昭和49年度から，改めてこの問題に着手，その基礎研究として，「幼児・児童の関係語の理解と習得過程の実験」，および「幼児の言語および学習行動の観察」を継続する。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

室長 村石昭三 2 主任研究官 大久保 愛 1—(2) 研究員 岩田純一 1—(1) 川又瑠璃子 2 非常勤職員 福沢周亮（筑波大学助教授，53.2.6～53.3.31）1—(1)

なお，実験に際しては，別掲の協力学校，協力園，および特定幼児の母親の協力を得た。

C 本年度の作業

1 幼児，児童の認知発達と語の意味習得に関する調査研究

(1) 幼児，児童の「大きい—小さい」概念の発達に関する実験的研究。

51年度の研究では，幼児の「大きい—小さい」という語の意味，理解のプロセスを調査実験した。

その結果，幼児は，「大きい—小さい」の判断を対象の垂直次元（高さ）にもとづいて判断する傾向が確められた。そこで，本年度は，「大きい

「小さい」という語の意味概念を理解させるための訓練的実験を試みた。
被験児、4歳3カ月～6歳11カ月。30名。

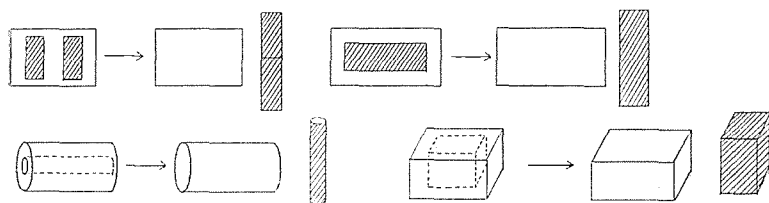


図 1

図1のような、刺激対の大小判断をさせる時、子ども自身に、対象間の
含み含まれる関係に気づかせる。

- ① 最初、含み含まれる関係にある刺激対を見せる。
- ② それから、平面図形は前後、立体形は上下になるように両刺激を配
置して、大一小判断させる。
- ③ 子どもに、小さい方の刺激を大きい方の上に重ねたり、入り込ませ
たりして、含み含まれる関係になるような操作を実際にやらせる。
- ④ ②で誤った大一小判断をした子どもには、もう一度、小さい方の刺
激をとり出し、上下前後になるようにおき、大一小判断を求める。
その際、「YはXの中に入ってしまうでしょう。YとXではどちら
が大きいかな？」と質問する。

〔注〕(3)(4)において、上下・前後の刺激布置で、正しい大一小判断をした子ども
には、実験者が含まれた方の刺激をとり出し、静かに、図1のような平行位
置にもっていき、そして、又それを含み含まれる関係にして、「そう、やっ
ぱりYはXの中に入ってしまうね。XはYより大きいね」と言語化してやる。

これを平行して同じ子どもに、長さ、太さ、高さ、広さ、深さで異なる事
物図の対を見せ、その差異を言語化させ、「大きいー小さい」理解との関連
性をみた。

協力園：東京 板橋区 帝京幼稚園（園長 沖永 キン）

東京 北 区 としま幼稚園（園長 滝沢豪一郎）

東京 北 区 豊島東幼稚園（園長 曾根 栄子）

研究の経過と問題点：この含み含まれるという刺激間の関係を見せる経験が、子どもの「大きい 小さい」語の意味、理解の形成に何らかの効果をもつことが推測される。

(2) 幼児の言語および学習行動の観察

本年度の方法および結果

被験者：3歳児1名、昨年度と同一児（小泉健彦，昭和49年3月3日生）

方 法：毎月誕生日の同日前後に午前中2時間を定期的に追跡観察と録音。（昨年度に引き続いて，満4歳時までの一年間を母親の協力を得て行った。カセットテープ往復120分を使用）

作 業：①昨年度録音し，文字化の終了した幼児のことばをカード化した。（満2歳半までと満3歳時の24時間調査のもの）

②それらのカードを使用して，五十音順別および意味分類別の作業をはじめている。

2 報告書等の作成

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のうち，幼児の語彙力調査に関して，報告書作成のために必要な資料の整理分析を進めた。

D 今後の予定

昭和53年度は前年度に引き続き，「幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査」を継続研究しながら，昭和51年から3年計画で着手した文部省の科学研究費（一般研究A）による「幼児・低学年児童の語彙調査」の基礎的課題を研究していく予定である。

高校教科書の用語・用字調査

A 目 的

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために、国立国語研究所では、これまでに、婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種、新聞三紙を対象として、調査を重ねてきた。この調査研究は、以上の諸調査のあとを受けて、国民が一般教養として各分野の専門知識を身につける時必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高等学校教科書を対象に調査分析するものである。

B 担 当 者

言語計量研究部

部長 斎賀秀夫 第一研究室、第二研究室、第三研究室の全員

C これまでの経過

この調査は昭和49年度に発足した。51年度までの経過は、次のとおりである。

- (1) 調査対象の選定……高校の社会科、理科、数学の教科書10冊を対象として選定した。すなわち、政治経済、倫理社会、地理B、世界史、日本史、生物I、化学I、物理I、地学I、数学Iである。範囲を社会科、理科、数学に限り、国語科教科書を含めなかったのは、研究目的に照らして、専門知識を体系的に記述した一まとまりの説明文を対象としたためである。また、これまでの用語用字調査がサンプリング調査であったのに対して、この調査は、各分野の知識体系を記述する用語を分析するという観点を有することから、全数調査を主とし、調査対象の概略を知るために先行させた二十分の一の規模のサンプリング調査を従として行った。なお、調査対象

とする教科書の選定と収集については、教科書協会の協力を得た。

- ② 調査項目の決定……用語用字調査の結果として作成する用語表・用字表の種類および形式、分析項目を検討し、決定した。
- ③ 調査単位の決定……文節から助辞を切り出したもの（W単位）と、それよりも小さく、形態素に近いもの（M単位）との二種類に決定した。
- ④ 作業過程の決定……(a)台帳作成・管理、(b)文・段落等の情報の記入、(c)単位切り・その検査、(d)清書・その検査、(e)データさん孔、(f)原文の機械読みこみ、および電子計算機による機械的チェック、(g)出力・印字（入力データ形式で各種チェック情報の付いたもの）、(h)校正、(i)修正データ作成・さん孔、(j)再読みこみ処理、(k)修正検査用ミニKWIC（M単位・W単位）および教科書原文形式出力の作成、(l)出力・印字、(m)校正、(n)修正データ作成・さん孔、(o)修正機械処理、(p)最終ファイル作成、(q)同語異語判別作業、(r)判別結果の機械処理、(s)比率計算、(t)語彙表作成、(u)文脈付き用例表作成、(v)文字集計など。
- ⑤ 作業の実施……上記④の過程に従い、機械処理システムを設計し、(o)のデータ修正システムまでプログラムを完成させた。また、(p)最終ファイル作成、(q)同語異語判別のためのシステムの検討に着手した。データの人手および機械による処理は、全体の二十分の一の標本および政治経済は(n)の段階、倫理社会・日本史・地理B・生物I・物理I・化学Iは(m)の段階、世界史は(f)、地学Iは(e)の段階に達した。なお、数学Iは(b)の段階までで作業を中止した。

D 本年度の研究作業

- 1) 機械処理プログラムの作成……機械処理を進めるためのプログラムは、前年度までにデータ修正が完成しており、本年度は(p)最終ファイル作成と、(q)同語異語判別システムの設計を中心に進めた。前者については、最も基本になると思われる、W単位用例付きM単位集計表作成システムの

プログラミングまでを終えた。後者については、前年より試みていた判別情報として漢字テレタイプで1字付加する方式をさらに進めて、出現形の先頭の漢字1字を判別情報として機械的に取り入れ、変更するものについてのみ人手によって付加するという方式を採ることにした。その基本的な考え方については以下の報告に述べられている。

土屋信一「高校教科書の同語異語判別システム」(『電子計算機による国語研究IX』(報告61) 所収)

また、これに至る経過および作業の実際については、『言語計量研究部季報』に、「高校教科書の同語異語判別作業について」(1977秋)・「同語異語判別作業の見通しと問題点」(同)・「同語異語判別作業の見通しと問題点 その二」(1977冬)と題して報告されている。

- 2) データの人手および機械による処理……前年度のあとを受けて作業を進めた。作業の手順としては、(i)・(j)を飛ばして、(k)・(l)に進み、(n)・(o)の段階で(i)・(j)とまとめて、データ修正処理を行うことにして先へ進んだ。これは、(h)校正に多くの日時を要するため、全体の進行状態を考慮に入れたためである。この結果、全データについて、(l)の段階まで達し、世界史・地学は(m)の段階、日本史・地理・物理・化学は(n)の段階に達し、二十分の一の標本データ・政治経済・倫理社会は(o)の段階まで達した。修正データの作成・さん孔・機械処理・検査という過程は一通りでは終わらず、何度か繰り返して、初めて誤りがなくなるもので、本年度の大半は、これに労力を費やした。

E 今後の予定

上記(C4)の予定に従い、作業を継続する。来年度は、データ修正の機械処理(o)を上半期に終了させ、最終ファイル(磁気テープ)を完成させ、引き続き、同語異語判別作業(q)と、その判別結果の機械処理(r)に進む予定である。

現代表記の多様性の実態と表記意識に 関する調査研究

A 目 的

現代の国語にみられる表記のゆれや誤用について、その実態および表記主体の意識について、三年計画で、調査研究を行う。本年度は、その第一年目にあたる。具体的には、この研究によって、表記のゆれや誤用について、次のような事項を明らかにすることを目的とする。

- ① どのような語に現れ、どのような類型があるか。
- ② それをひきおこす要因に、どのようなものがあるか。
- ③ 専門家あるいは一般国民がどのような意見をもっているか。

B 担 当 者

言語計量研究部 部長 斎賀秀夫 第二研究室の全員

C 本年度の作業

1. 基礎調査

表記のゆれや誤用の生じやすい語の類型をとらえ、その所在を明らかにするためには、ゆれや誤用の一覧できる台帳を作成することが必要である。そのために、次の作業を行った。

- (1) 『新聞用語集（改定版）』（日本新聞協会刊）に所収の「用字用語集」をもとに、六種類の小型国語辞典について、ゆれや誤用のある語の表記の示し方がどのようになっているかを一覧できるカード（約二千項目）を作成した。
- (2) 電子計算機内に、表記のバラエティが登録できるファイルを備え、随時の検索を可能にするために、現代雑誌九十種の表記調査の台帳にもとづき、入力原稿を作成し、約三分の二のデータ（約二万五千項目）のバ

ンチ入力を終えた。

2. 実態調査

実際に表記された文章において、語表記の実態がどのようになっているかを調べるために、次の作業を行った。

- (1) 現代の各種の分野における語表記のバラエティをとらえるために、月刊誌160種、週刊誌33種（424冊）を対象として、データの採集に着手した。
- (2) 実務的な文章における実態をとらえるため、全国各都道府県の広報紙86種（都市部・町村部各43種）を対象に、データの採集を行った。そのうち、約半数については、整理・分析に着手した。

D 今後の予定

基礎調査、実態調査については、来年度で、採集・整理を終え、分析に着手する。また、来年度は、意識調査として、専門家を対象としたアンケート調査、一般成人を対象とした集合調査を行う。

文字・表記の体系的記述のための基礎的研究

A 目 的

現代語の文字体系・表記体系を記述するために必要なデータ・文献などを収集・整理し、今後の大量調査の実施に備える。あわせて、調査結果の記述法の開発のために、小規模な実験的研究を行う。本年度から実施する研究であるが、前年度の「現代語の表記についての調査研究」の内容をも、その一部として、発展させたものである。

B 担 当 者

言語計量研究部 第二研究室

室長 野村雅昭 (52.5.1 言語計量研究部第三研究室より配置換え)

研究員 佐竹秀雄 研究補助員 大滝弘美 (53.3.31 退職)

C 本年度の作業

1. 基礎資料の整備

- (1) 新聞用語調査の語表記台帳の作成……昭和41年の朝日・毎日・読売3紙1年分を対象にして実施した、新聞の表記調査のうち、漢字に関する部分は、昭和50年度に報告を行った(『現代新聞の漢字』<報告56>)。その後、かな表記語についても、整理を進め、語表記台帳を作成する作業を継続してきたが、本年度は、かな表記語のカード化および分類を行い、一部、漢字表記語とのマッチング作業に着手した。かな表記語の分類・整理の作業は、ほぼ完了したが、そのうち、同表記別語の整理については、なお多くの部分を残している。
- (2) 文字・表記に関する研究文献の整理……雑誌『国語学』および『言語生活』の創刊号より52年3月刊行分までのものについて、現代語の文

字・表記に関する研究論文をカード化した。また、国語関係の主な講座類（戦前のものもふくむ）についても、同様の作業を行った。

2. 文字体系の記述法の検討

(1) 文字使用の量的構造を比較する方法の開発……新聞を対象とした3種類の漢字調査（旧近代語研究室による郵便報知新聞の調査〈明10～11〉、カナモジカイによる5紙の調査〈昭10〉、本研究室による3紙の調査〈昭41〉）を比較するために、同一の基準によって、整理をしておし、同一字母の使用率の推移を中心にして、量的構造の変化をとらえるための作業を行った。

(2) 文字の機能の分析……漢字によって表記されることを原則とする、字音形態素の造語力について分析を行った。特に、本年度は、接辞的な機能をもつものの分析を中心とし、結果を下記の文献に報告した。

野村雅昭「接辞性字音語基の性格」（『電子計算機による国語研究』IX〈報告61〉所収）

3. 表記体系の記述法の検討

(1) 個人における表記行動の分析……ごく標準的なひとりの人間を仮定し、それがとるであろう、種々の表記行動を体系化することによって、個人の表記行動を過不足なく説明できるような、標準モデルを構築することを試みた。結果は、下記により、口頭発表で行った。

佐竹秀雄「表記行動のモデル化」（国語学会春季大会）

(2) 表記に関する言語現象の分析……これまでの各種の調査結果から、個人が表記に迷いを生ずる場面について、データを採集した。

D 今後の予定

語表記台帳の作成については、同表記別語の分類を進め、カード整理を終えて、台帳への転記にとりかかる予定である。記述法の検討については、本年度は未了に終わった問題の分析を進めるとともに、いくつかの新たなテーマについて、分析を試みる。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使用した各種調査と言語処理に対する、プログラミング技法、システム開発、言語理論のモデル化等に関する基礎理論を研究することを目的とする。これらの研究は、電子計算機による用語用字調査、言語の自動処理のための研究、また言語情報処理装置開発の基礎的資料収集に有効な働きをする。そのほか、電子計算機利用の効率化に対しても役立つものとなる。

B 担 当 者

言語計量研究部第三研究室

主任研究官 斎藤秀紀 研究員 田中卓史 研究補助員 小高京子
沢村都喜江 科野千夏 米田純子

C 本年度の研究及び作業

本年度の研究及び作業は、以下のとおりである。

I. 装置の開発に関する研究

多目的漢字入力装置の機能分析として、漢字データ入力、修正及び漢字パターン・デザイン機能を含む装置試作のための機能分析を行った。試案は、「多目的漢字入力システムの試案」(斎藤)と題して『電子計算機による国語研究IX』(報告61)に発表した。

II. 語彙調査に関連する研究

ランダムアクセスファイルを利用し、必要な時点で必要な部分の KWIC (カナ)を生成するシステムが完成した。

「KWIC・語彙表 システムカード入力・磁気ディスク利用」(田中『季報1977秋』)

Ⅲ. 文字，表記に関する研究

新聞の調査で得られた漢字情報に国研漢字コードを割り当て，磁気ディスクに蓄えることにより，国研コードからのランダムアクセスを可能にした。

「ランダムアクセス漢字情報ファイルの作成」(田中・科野『季報1978春』)

現代語表記の変容にかかわる諸条件を与えて，漢字かなまじり文を出力するプログラムが完成した。

「現代語表記の変容シミュレーションプログラム1—語種・品詞による変容—」(田中・科野『季報1978春』)

「同2—漢字字種，出現頻度による変容—」(田中・科野『季報1978春』)

Ⅳ. 新しい言語処理に関する研究

言葉の意味を理解し，考え，仕事をする，あるいは質問に答えるといった高次の言語処理を機械に行わせるための分析を開始した。

「言語処理機械としての頭脳模型」(田中『季報1977夏』)

「人工知能のための言語分析—基礎的考察—」(田中『電子計算機による国語研究IX』<報告61>)

D 今後の予定

多目的漢字入力装置の試作と漢字処理に必要なソフトウェア機能分析，プログラム開発を行う予定である。その他，新しい言語処理システムの研究開発を継続して行う。

日本語の対照言語学的研究

「外国語としての日本語」研究の中心的分野の一つである日本語と外国語との比較・対照研究の基礎を築くもので、将来諸外国語との個別的な対照文法を記述することを目標とする。本研究は次の二つの項目に分けて進められた。

(Ⅰ) 対照文法記述のための概観的研究

(Ⅱ) 日独語の対照言語学的研究

ここでは、(Ⅰ)、(Ⅱ)の順に説明する。

I 対照文法記述のための概観的研究

A 目 的

対照言語学において、対照文法の記述方法を確立し、それに基づいて実際に記述することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研究室(52.10.1以降日本語教育センター第一研究室)

室長(取扱) 野元菊雄 主任研究官 高田 誠(52.7.2以降西ドイツ出張)
研究員 志部昭平

C 本年度の作業

本研究は、日独・日英・日朝・日葡などの具体的・個別的な対照文法を試験的に試みることによって、将来の対照文法記述のための方法論を確立することにあるが、主に「日朝語の対照言語学的研究」を中心に研究を進めてきた。本年度はこの研究の枠組を概観し、基本的な資料を得るために次の作業を行った。

- ①対訳文献資料による日朝語の文法的形態素の対応用例の収集と整理：朝日対訳文献（現代文学作品，単語用例集）を利用し，約2万枚のカード作成を行い，一部その整理を開始した。
- ②日朝語音韻の対照言語学的研究：朝鮮語を母国語とするものが，日本語の音韻を習得するに当たって困難を生ずるとされる問題点を日朝語の音韻構造の対照分析から探索し，その原因について分析した。

D 今後の予定

昨年度に引き続いて，

- ①日朝対訳文献を利用して，昨年度と同規模・同程度の用例収集を行い，その整理を行って日朝語の文法構造面での研究の枠組みを作る。
- ②上の研究に基づいて日朝対照文法記述の問題点の抽出を行い，一部実験的に対照記述を行う。来年度は格助詞の構造について対照分析を行う。
- ③以上の研究によって，文法構造の類似度の高い言語間での対照文法記述の方法論を探索する。

II 日独語の対照言語学的研究（国際共同研究）

A 目 的

この研究は，「日独文化協定」の趣旨に基いて 国立国語研究所とドイツ連邦共和国ドイツ語研究所とのあいだでとりかわされた「日独語の対照言語学的研究」に関する共同研究計画についての合意書に則って進められているもので，ドイツ語話者のための日本語教育，及び日本語話者のためのドイツ語教育に対して，言語学的な基礎を確立することを目的とする。この計画は，本年度より3年計画で，日本学術振興会—国際共同研究—の援助のもとに進められている。

B 担 当 者

この研究を主として担当するのは，国立国語研究所では，

所長 林 大

日本語教育センター センター長 野元菊雄

日本語教育研究室 (52.10.1 以降第一研究室) 主任研究官 高田 誠 (在ドイツ, 50ページ参照) 研究員 志部昭平 教材開発室研究員 日向茂雄
研修室長 水谷 修 研究員 田中 望 石井久雄 研究補助員
高野美智子

言語行動研究部 第一研究室研究員 杉戸清樹 第二研究室主任研究
官 江川 清 研究員 米田正人

ドイツ語研究所側では

金子 享, 吉島 茂, ルドルフ・シュルテペルクム, イエンス・
リックマイヤー, 本田義昭, ユッタ・キューナスト, ヨプスト・
マティアス・シュパンナーゲル (53.2 退職)

C 本年度の作業

両研究所は、それぞれの研究成果をたがいに提供すると同時に、共同研究の効果的な推進のために研究員を相互に派遣することになっており、国立国語研究所からは、主任研究官 高田 誠が文部省在外研究員としてマンハイムのドイツ語研究所に滞在し、また所長 林 大、主任研究官 江川 清、研究員 志部昭平が短期間の準備的調査を行うため渡独した。

またドイツ語研究所からは研究員 イエンス・リックマイヤー氏が53年2月約2か年の予定で来日、国立国語研究所で研究を開始した。

研究テーマは、ドイツ語研究所が主として「シンタックス」「形態論」を担当し、国立国語研究所は「語彙」及び「言語行動様式」の対照研究を主として担当している。

I 日独語各話者の言語行動様式の対照的研究

本年度の目的は日本人とドイツ人の言語行動様式を記述・対照し、このことによって、日独語各話者が、各々の言語行動場面において経験する、両国

語話者の言語行動様式の差違に基くコミュニケーション上のさまざまな障害などの問題点を探求することにある。

本年度は3年計画の第一年次として来年度以降の本調査に備えて予備的調査研究を行った。

①準備的研究：日本人とドイツ人の言語行動様式（ことに非言語的行動）の違い，そこから生じたさまざまな誤解，コミュニケーション上の障害などに触れた，各種のエッセイ，紀行文，比較文化論などの著作の中から，当該部分を抽出しカード化した。カード化には，身ぶり・しぐさ・表情の違いのみならず言語形式によるコミュニケーションとは直接関わらない習慣・思考法・文化的背景の違いをも含めた。

②問題点の整理・検討： ①で得られた雑多な資料をもとに，各種の発話場面の分類・整理を行い，各場面における発話意図，さらにそれらの発話の持つ文化的背景，また具体的な身ぶり・しぐさ・表情などのもつコミュニケーション上の機能・意図などの粗い項目一覧を作成した（第一次粗案）。

③言語行動様式の項目一覧の検討・補足： ②で得られた第一次粗案をドイツ語研究所員およびドイツ在留日本人による検討・補足ならびに情報収集などを行って，ドイツ人の言語行動様式の総体にわたる項目一覧を修正増補した。

④ドイツ人の言語行動観察調査： ③の調査と並行して，

a. 日常生活におけるドイツ人の生の言語行動場面たとえば，買物・レストラン・乗り物・公園・ホテル・家庭などにおけるドイツ人間およびドイツ人と日本人間の実際の言語行動の客観的な観察記録を試みた。（なお，来年度以降の本調査では8ミリフィルムによる記録を行う予定である。）

b. ドイツ人を含めたヨーロッパ人によって観察・記述されたドイツ人の言語行動様式³についての文献調査などを行って，来年度以降の調査の手がかりを得た。

II 日独語の基本的語彙に関する対照言語学的研究

学習の基本と考えられている日独両言語の語彙の特色を明らかにするため

本年度は、「ドイツ重要単語 4,000」(白水社, 1968) および「ドイツ基本語 5,000辞典」(白水社, 1971) の語彙を『分類語彙表』(資料集6) の上に書き込む作業を名詞について一部試みた。

Ⅲ 文部省在外研究員として昭和52年7月2日来ドイツ語研究所に派遣された高田 誠は、国立国語研究所側の分担する研究課題に従事するほか、ドイツ語研究所の分担する、シンタックスに関する各小テーマ研究のうち、主として a 敬語法の対照研究 b 文末詞・文末表現の対照研究 c 応答詞・応答表現の対照研究に参加した。

D 今後の予定

I 言語行動様式の対照的研究について、

本年度の予備的調査をふまえ、

①言語行動様式に関する日独対照記述の整備

②ドイツ人社会における、ドイツ語話者の言語行動様式の実態調査・記述を行う。

②については、a. ①で得られた言語行動様式の日独対照記述のうちから、特に注意すべき事項や問題点につき、ドイツ人社会でアンケート調査・面接調査を実施、より詳細な情報を得る。b. 上の調査に並行して、後日の詳細な分析・検討に耐える客観的な資料を得ることを目的として、ドイツにおいてドイツ人の言語行動の録音・録画(8mm映画)資料を作成する。

Ⅱ 語彙に関する対照的研究については、本年度同様の作業をひき続き試みる。なお、高田は54年7月までドイツ語研究所に滞在の予定である。

日本人と外国人との言語行動様式の 比較対照的研究

A 目 的

日本人の言語活動の特色を明らかにするためには、文法、音韻、文字等言語そのものの構造に関する研究ばかりでなく、言語を実際に使用する際の具体的な言語行動様式についての研究が不可欠である。あいさつ、依頼、ことわり、弁解、催促、質問等々の行動場面における、ことばの流れの持つ枠組みとそれに伴う身振り、表情、更に位置関係や時間的要件なども重要な研究対象となる。

本研究は、外国人の言語行動の習慣との比較対照をしながら、日本人の言語行動様式の類型一言葉を中心とするコミュニケーションのパターンの体系づくりを目指すものである。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研究室（52.10.1以降は日本語教育第一研究室）
室長 水谷 修（52.4.18以降日本語教育研修室長）野元菊雄（52.4.18以降
室長事務取扱）主任研究官 高田 誠（在ドイツ、50ページ参照）研究員
志部昭平

C 本年度の経過

この研究は本年度が四年計画の第一年次にあたり、資料の収集と整理分析作業の第一段階である第一次文字化作業を中心として行った。資料源はテレビ放送のドラマ番組に限定し、あらかじめ準備した採録予定に従ってVTRに録画した。録画された候補作品について、その使用言語が特殊であるか否かの検討を行い、研究資料として使用しうるもの1,665分分のドラマ（30篇）を採集した。この使用言語が特殊であるか否かという基準は、著しく日常性

を欠くもの、特定の地方（東京を除く）の言語を使用しているものなどである。

30篇 1,665 分分のドラマの V T R について第一次文字化作業を開始し、そのうち10篇について作業を終了した。第一次文字化作業終了分のうち2篇を使用して、第二次文字化作業と整理分析のための検討を開始した。この段階においては、外国人助言者4人（米国人3人、英国人1人）の協力を得て、行動様式の日英両語使用者間の彼我の差異に関する情報を収集した。

D 今後の予定

Discourse の単位別による会話の流れの区分作業、イントネーション、卓立等音調や非言語行動に関する概観を付加した第二次文字化資料作成作業を実施し、一定の単位ごとにまとめた会話例集を作成する。この作業に併行して外国人助言者との共同作業によって日本人の言語行動様式の類型のうちに存在する特徴を把握していく。資料の採集は第一年次に行ったのとは異った領域のものを更に追加していくことを予定している。

日本語教育のための基本的な語彙に 関する調査研究

A 目 的

外国人の日本語学習者が、専門領域の研究、または職業訓練にはいる基礎として習得すべき基本的な日本語の語彙について標準を立てることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研究室（52.7.2以降は日本語教育センター第一研究室）

室長（取扱）野元菊雄 主任研究官 高田 誠（在ドイツ、50ページ参照）
研究員 志部昭平

C 本年度の作業

本年度は3年計画の第3年次にあたり、前年度までに終了した『分類語彙表』（資料集6）所載の約四万語についての判定作業の結果を電子計算機を用いて集計整理し、上位二千語並びに六千語を目安とした基本語彙集計資料を作成した。

この資料は各判定者の判定点を集計し、得点順に25点以上の語 2,090 語、9点以上の語 7,182 語が得られた。

D 今後の予定

上で得られた第一次集計資料について、さらに ①既に得られている統計的調査の成果を対比・参照するとともに、②語の文法的性質や意味用法からの分析、③学習者の日本語学習目的からの検討、④外国語の基本語彙との対照、などを行って日本語教育のための基本的な語彙について最も妥当な標準

を得たい。

また、この二つの資料をもとにして諸外国語との基本的な語彙についての対照研究にまで発展させる予定である。昭和53年度から始まる4年計画の特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する比較対照研究」にひきつがれる。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について、教授法、教育内容、教材に関する問題点を収集整理し、日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を探究し、日本語教育の内容方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター

第一研究室（52.9.30まで日本語教育研究室） 室長（取扱）野元菊雄 主

任研究官 高田 誠（在ドイツ、50ページ参照） 研究員 志部昭平

第二研究室 室長（52.10.1新設） 上野田鶴子（52.10.1以降）

C 本年度の作業

昨年度に引きつづき、「年少者に対する日本語教育機関——外国人学校等」からの委員と日本語教育センターのメンバーによる研究協議集会を開催した。協議内容は昨年度の課題であった問題分析から、問題解決のための共同研究体制づくりへと発展し、幼児の言語習得、文字の導入についてなどのテーマで活発な討論が行われた。

外部からの委員に委嘱した方々は次のとおりである。

松本多嘉子 （聖心インターナショナル・スクール主任）

羅 長岡 （東京中華学校長）

北村 房子 （西町インターナショナル・スクール部長）

村田 経和 （東京ドイツ学園教員）

ヒュー・ブラウン （アメリカン・スクール・イン・ジャパン部長）

高橋 美智 (玉川学園高等部教員)
金田真知子 (サンモール学校教員)
加藤ちえ子 (名古屋国際学園教員)
法崎 久子 (横浜インターナショナル・スクール教員)
細川 廓真 (横浜山手中華学校教員)
海野 光子 (カナディアン・アカデミー部長)
羽田 満子 (ステラマリス・インターナショナル・スクール教員)
陶山 尚志 (在日米軍教育局教員)
菊地 章 (横田アメリカン・ハイスクール教員)
中村 正巳 (座間ハイスクール教員)
新田 文輝 (キニック・ミドルスクール教員)
富松 民子 (サリバンズ・エレメンタリースクール教員)

また、機関訪問を中心とする実態調査も実施し(広島大学ほか)、資料、文献による情報の補いと確認をした。

D 今後の予定

「年少者教育」に関する調査研究を更に継続するとともに、「帰国子女に対する日本語教育」にも調査対象を拡げていく計画である。

日本語教育のための研修に関する調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育に関して、教員の資質能力の向上をはかること、教授の効率化をめざすことは、現在の日本において大きな社会的要請となっている。教員の研修一般についてそのあり方を追及すると共に、当研究所で実施している研修に対して、より適切な指針を樹立することが目下の急務である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研修室

室長 武田 祈 (52.4.18 日本語教育教材開発室長) 水谷 修 (52.4.18以降)

研究員 田中 望 石井久雄 研究補助員 高野美智子

C 本年度の経過

日本語教育センターでは、52年度に三種の日本語教育研修関連事業を実施した。三種の研修の内容は52年5月23日から53年2月28日にかけて行われた日本語教育長期専門研修、52年7月26日から7月30日（東京会場）、8月4日から8月8日（大阪会場）に施行された日本語教育夏季研修、52年11月26日、12月3日、53年3月4日、3月11日の四回にわたって開かれた日本語教育公開講座である。(89ページ参照)

これらの研修の実施に先立つ準備の過程における教育計画の立案と、指導過程での問題解決、実施後の反省を通じて、研究調査活動としてはきわめて現実的な問題把握に止まったが、事業運営に直接関わる実務の中から今後解明していかなければならない多くの問題を発見し得たことは有意義である。

D 今後の予定

52年度に得られた問題意識と当面に解決すべき課題を次のように設定し、調査研究を推し進める予定である。

a) 日本語教育の研修プログラム開発に関する研究 b) 研修効率向上に資するための調査・研究

a) 日本語教育の研修プログラム開発に関する研究では、53年度は、夏季研修の教科内容に即して、その一部のパイロットプログラムを開発する。対象は i) 音声教育 ii) 表記教育 iii) 文法教育 iv) 語彙教育とし、印刷物、VTR、AUDIO などLLを含めての活用を図る。

b) 研修効率向上に資するための調査・研究では、いかなる研修内容が求められているかという内容の必要性に関する実態を知るためと、人的な需要と供給の実情を確実に把握するため、現場調査をする。研修参加者の追跡調査もあわせて施行する。

日本語教育教材開発のための調査研究

A 目 的

既存教科書における語彙、構文について種々の観点から調査・整理して教材、特に視覚教材に資することを当面の目的としている。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育教材開発室
室長 武田 祈 研究員 日向茂男

C 本年度の作業

アルフォンソの教科書のカード化を計画・実施した。

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

A 目 的

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学会の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、国語および国語問題に関する情報を収集・整理し、国語研究の基礎的資料を整備する。このために次のことを行う。

1. 刊行図書・雑誌論文等の調査を行い、分類別文献カード目録を作成する。
2. 諸新聞から関係記事を切り抜いて整理・製本し、研究資料を作成する。
3. 『国語年鑑』を編集する。

B 担 当 者

言語変化研究部長 飯豊毅一

文献調査室 研究員 田原圭子 研究補助員 伊藤菊子 中曽根 仁

C 本年度の作業

前年度に引き続き、昭和52年度に刊行された各種文献を調査し、情報を収集・整理した。昭和52年1月から12月までの情報については分類別文献目録カードおよび「新聞所載国語関係記事切抜集」25冊を作成した。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに、『国語年鑑』〈昭和53年版(1978)〉に掲載する。

『国語年鑑』〈昭和52年版(1977)〉は、51年1月から12月までの国語に関する研究成果、関係学会の動向、ことばに関する世論などをおもな内容としておさめ、第一部展望、第二部文献（刊行図書・雑誌論文・新聞記事ほか）、第三部雑報（各学会・関係諸団体の活動報告ほか）、第四部国語関係者名簿

(国内・国外)、第五部資料(その年に告示された公的決定事項など)および編著者名索引に分けて編集し、52年8月に刊行した。

なお、本年度は「国語年鑑掲載文献総目録——雑誌論文篇」作成のための準備作業を行った。

以下、国語および国語問題に関する昭和52年の情報の傾向を知る手がかりとして、採録した文献の冊数(または点数)を項目別に示す。()内は51年の数である。

外国発行の刊行図書・雑誌論文等については、前年までと同じく、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』(国立国会図書館)、その他の目録から情報を補い、総数825冊についての分類別カード目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語(学)	34 (42)	マス・コミュニケーション	6 (5)
国語史	45 (59)	国語問題	11 (5)
音声・音韻	14 (8)	国語教育	
文字・表記	24 (13)	国語教育一般	9 (15)
語彙・用語		学習指導	18 (12)
語彙・用語	33 (25)	ことばの指導	0 (0)
人名・地名	12 (8)	文字教育	3 (2)
文法	11 (16)	語彙・文法教育	2 (2)
文章・文体	12 (12)	聞く・話す	0 (0)
方言・民俗	77 (113)	読む・読書指導	5 (10)
ことばと機械	4 (4)	書く・作文指導	6 (11)
コミュニケーション		文学教育	9 (15)
コミュニケーション一般(言語生活)	47 (31)	古典教育	0 (1)
言語技術(話し方・書き方)	58 (52)	漢文教育	0 (0)
		特殊教育	1 (4)
		学力調査	0 (0)

国語教科書・教材研究	2 (8)
言語能力の発達	11 (7)
外国人に対する日本語教育	5 (10)
言語学その他	51 (63)
辞典・用語集	
辞典・用語集一般	0 (0)
国語辞典	6 (12)
用語辞典・用語集	18 (37)
特殊辞典	26 (22)
索引	25 (13)
資 料	
資料	19 (16)
史料	16 (14)
解題・目録	10 (13)
年鑑	15 (15)
計	645 (695) 冊

追補 (51年12月以前刊行分)	
国語学その他	9 (10)
国語史	22 (11)
音声・音韻	4 (1)
文字・表記	16 (2)
語彙・文法	11 (9)
文章・文体	2 (0)
方言・民俗	26 (21)
ことばと機械	0 (2)
コミュニケーション	20 (12)
マス・コミュニケーション	9 (0)
国語問題	1 (1)
国語教育	8 (11)
外国人に対する日本語教育	4 (6)
言語学その他	4 (46)
辞典・索引・資料	44 (33)
総計	825 (860) 冊

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物や雑誌から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』

(国立国会図書館)の人文・社会編，『LLBA』(Language and Language Behavior Abstracts)，その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，3,795点に達した。(連載物については，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。)

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数(目録から採録した分は含まない。)

a 一般刊行雑誌(学会誌等を含む)……476(414)種

国語・国文・言語ほか	177 (154)	国語教育	24 (22)
方言・民俗	21 (13)	日本語教育	3 (5)
国語問題	6 (5)	マス・コミ関係	10 (11)

外国語	11 (12)	ほか)	110 (86)
週刊誌・総合誌	0 (0)	臨時に入った雑誌	37 (36)
文芸・詩歌・芸能	8 (9)	外国誌	69 (61)
その他(教育・社会学・心理学			

b 大学・研究所等の紀要・報告類……309 (284) 種

2 論文・記事の分類とその点数

国語(学)		史的研究	92 (84)
国語(学)一般	92 (156)	古典の注釈	
時評・随筆	88 (70)	注釈一般	0 (0)
国語史		上代	13 (19)
国語史一般	89 (66)	中古	8 (17)
訓点資料関係	13 (6)	中世	9 (5)
音声・音韻		近世以降	4 (5)
音声・音韻一般	61 (58)	方言・民俗	
史的研究	34 (34)	方言一般	31 (20)
アクセント・		各地の方言	
イントネーション	17 (9)	東部	58 (38)
文字・表記		西部	22 (14)
文字・字体	16 (49)	九州・沖縄	17 (15)
表記	35 (40)	民俗	29 (7)
語彙・用語		ことばと機械	
語彙・用語一般	118 (97)	言語情報処理	16 (34)
古語	55 (47)	研究用機器	0 (4)
現代語	37 (24)	コミュニケーション	
新語・流行語	18 (6)	コミュニケーション一般	39 (66)
外来語	3 (0)	言語生活	262 (55)
人名・地名	25 (38)	言語活動	
辞書・索引	62 (49)	言語活動一般	58 (74)
文法		書く・読む	10 (42)
文法上の諸問題(現代語法)		話す・聞く	19 (14)
史的研究	79 (58)	マス・コミュニケーション	
敬語法	8 (27)	一般的問題	6 (2)
文章・文体		新聞	4 (3)
文章・表現一般	73 (45)	放送	44 (39)
		広告・宣伝	18 (6)

印刷・出版	4 (0)
国語問題	
国語問題一般	142 (53)
表記法	6 (15)
国語教育	
国語教育一般	192 (135)
国語教育史	12 (12)
学習指導	308 (159)
ことばの指導	37 (13)
文字・表記教育	7 (5)
語彙教育	11 (0)
文法教育	15 (20)
聞く・話す	6 (2)
読む・書く	
読む・書く一般	43 (12)
読解指導	25 (8)
読書指導	9 (34)
作文指導	64 (100)
文学教育	12 (51)
古典教育	8 (8)
漢文教育	1 (3)
特殊教育	31 (17)
学力評価	26 (19)
国語教科書・教材研究	81 (76)
言語能力の発達	24 (22)
外国人に対する日本語教育	57 (53)
言語(学)	
言語一般	187 (108)
意味	6 (10)
比較・対照研究	22 (34)
翻訳の問題	28 (9)
外国語研究	28 (11)
外国語教育(学習)	73 (76)
各国の言語問題(教育)	17 (15)
言語障害研究	22 (21)
資 料	

資料一般	21 (30)
国語資料	4 (5)
翻刻	27 (20)
目録	15 (3)
書評・紹介	
国語学その他	30 (21)
音声・音韻	1 (3)
文字・表記	3 (1)
語彙・用語	13 (13)
文法	12 (11)
文章・文体	3 (7)
方言・民俗	8 (17)
ことばと機械	0 (0)
コミュニケーション	11 (5)
マス・コミュニケーション	1 (0)
国語問題	0 (0)
国語教育	11 (11)
外国人に対する日本語教育	0 (3)
言語学その他	18 (33)
計	3,405 (2,758) 点
追補(51年12月以前刊行分)	
国語学その他	19 (11)
国語史	24 (7)
音声・音韻	11 (12)
文字・表記	7 (8)
語彙・用語	43 (37)
文法	17 (16)
文章・文体	18 (12)
古典の注釈	11 (3)
方言・民俗	33 (19)
ことばと機械	2 (0)
コミュニケーション	18 (37)
マス・コミュニケーション	0 (0)
国語問題	19 (4)
国語教育	86 (34)

外国人に対する日本語教育	18 (8)	書評・紹介	13 (6)
言語学その他	45 (108)	総計	3,795 (3,089) 点
資料	6 (9)		

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は3,270点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日(夕)刊紙		週刊・その他	
朝 日	516 (362)	日本読書新聞	43 (64)
毎 日	499 (410)	週刊読書人	54 (78)
読 売	494 (651)	図書新聞	48 (42)
東 京	333 (315)	新聞協会報	54 (61)
サンケイ	365 (569)	教育學術新聞	24 (14)
日本経済	240 (164)	その他	47 (40)
北 海 道	260 (205)	計	3,270 (3,217) 点
西 日 本	293 (242)		

2 月別の切り抜き点数

1 月 249 (266)	2 月 266 (222)	3 月 268 (294)
4 月 301 (324)	5 月 269 (343)	6 月 279 (275)
7 月 297 (239)	8 月 243 (223)	9 月 272 (192)
10月 297 (290)	11月 262 (303)	12月 267 (246)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	260 (289)	問題語・命名	107 (106)
音声・音韻	21 (28)	人名・地名	77 (47)
文 字		文 法	16 (14)
文字・表記	74 (55)	文 体	
活字	12 (10)	文体・表現	44 (23)
語 彙		方 言	
語彙一般	49 (90)	方言一般	84 (98)
各種用語	42 (51)	方言と標準語	4 (4)
新語・流行語・隠語	99 (130)	各地の方言	24 (17)
外国語・外来語	35 (40)	言語生活	
辞書	45 (42)	言語生活一般	176 (168)

ことばの問題	92 (61)	話す(聞く)	4 (12)
ことばづかいの問題	38 (17)	読む(読書指導)	19 (19)
敬語の問題	46 (80)	書く(作文指導)	21 (12)
言語活動		文学・古典教育	5 (9)
言語活動一般	47 (42)	特殊教育	28 (27)
話すこと(聞くこと)	57 (35)	視聴覚教育	4 (7)
書くこと(読むこと)	18 (21)	学力テスト	40 (14)
読書	65 (60)	幼児語教育	35 (29)
ことばと機械	30 (19)	ローマ字教育	3 (1)
国語問題		言語学	
国語問題一般	44 (58)	言語学一般	49 (52)
表記の問題		外国語一般	81 (70)
表記一般	79 (61)	比較研究	69 (79)
当用漢字など	145 (72)	翻訳の問題	59 (52)
かなづかい	0 (39)	外国語教育	140 (86)
送りがな	1 (4)	外国語に関する紹介ほか	37 (43)
かな書き	1 (4)	日本語の研究と教育	137 (64)
横書き・縦書き	2 (10)	マス・コミュニケーション	
人名・地名の表記	42 (22)	マス・コミ一般	37 (53)
外来語表記	20 (62)	新聞	21 (17)
ローマ字	2 (30)	放送	22 (36)
国語教育		広告・宣伝	35 (44)
国語教育一般	109 (100)	出版	82 (143)
学習指導の問題		書評・紹介ほか	267 (325)
学習指導一般	68 (14)	計	3,270 (3,217) 点

切り抜き点数は、前年より50点あまり多かった(くわしくは『国語年鑑』<昭和53年版>に掲載)。ことしも前年に引き続き、各紙に国語に関する連載記事があった。主な動向を分類項目の点数から示す。「人名・地名」「人名・地名の表記」の点数が多くなっているのは、『北海道新聞』に地名に関する連載記事があったことによる。「当用漢字など」の項が多いのは、第12期国語審議会により、新漢字表試案が発表され52年1月22日の各紙に掲載され、以後、論説欄や投書欄、連載記事などとしてこれをめぐる意見や記事を各紙がとりあげたことによる。次に、「学習指導一般」の項が例年に比して多い

のは、文部省から小・中学校の「新学習指導要領案」が発表され、52年6月9日の各紙に掲載され（7月23日告示）、この関連記事が多かったためである。また、「日本語の研究と教育」の項も例年に比して多いが、これは、国際学友会のスト事件があり、留学生の日本語教育の問題が各紙で話題にされたためである。

「新語・流行語・隠語」「敬語の問題」「かなづかい」「出版」などの項が前年より少なくなっているが、前年はこれらを主題とする連載記事があったためである。

〔付 所外からの質問について〕

昭和52年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計	月	52年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	53年 1月	2月	3月	
		1,260	108	102	128	94	112	118	102	104	106	99	95	92

（前年度の質問件数は1,254件であった。）

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていた。件数の多かったものを示すと次のとおりである。用字用語について362件（用語一般159件、用字一般89件、同音類義語49件）、漢字の読み150件（姓名に関して54件）、字体82件、送りがな57件、かなづかい45件、敬語36件、方言34件などである。

上記の件数のうち、同一（または、同類）の内容について二回以上質問を受けた事項を、かなづかい、送りがな、字体、同音類義語の使い分けから例示する。

かなづかい		送りがな		塚・塚	4
こんにち <u>は</u>	8	行 <u>う</u>	11	吉・吉	3
～ <u>へ</u>	5	話 <u>し</u>	5	富・富	2
～ <u>づ</u> つ	3	生 <u>ま</u> れる	2	同音類義語	
基 <u>づ</u> く	2	取 <u>り</u> 扱う	2	移動・異動	2
間近（ま <u>ぢ</u> か）	2	字 <u>体</u>		異常・異状	2

機・器	2	(町村～, 沿革～)	図る・計る・量る	2	
(電気洗たく～)		誌上・紙上	2	初める・始める	2
規程・規定	2	生長・成長	2	早い・速い	2
史・誌	2	精算・清算	2	保証・補償	2

このほか、横書きの場合の数字の表記について（例えば、一つ、二つを1つ、2つと書くことの是非についてなど）8件、漢字のくり返しに「々」を使うことについて7件、「殿」と「様」の使い分け7件、「ニホンとニッポン」6件などが件数の多い事項だった。

なお、研究所および研究所の刊行物についての照会が93件あった。電話による質問のほかには、はがき・封書による質問が22通（海外からの1通を含む）、直接来所しての質問が2件あった。

以上の件数は、すべて文献調査室で受けた質問で、所員が個人的に受けた質問は含んでいない。

文部省科学研究費補助金による研究

談話行動の実験社会言語学的研究（代表 渡辺友左）（特定研究2）

<研究目的>

コミュニケーション行動としての言語行動を解明するためには、音声言語だけではなく、これを補い、またその代わりをなす非言語的行動との両者の有機的な関連性を明らかにする必要がある。また、言語行動は社会言語学的研究などにより明らかにされているように、行動の生じる場面や地域、さらに行動主体間の社会的・心理的諸条件によって変化するものである。

本研究は以上の観点から、談話行動の要素・特性・機能などを明らかにし、合わせて、言語行動の類型化、コミュニケーション・パタンの抽出などを行うことを主目的とする。なお、コミュニケーション行動は文化の型と強い連関をもつことが予想されるところから、当面は東京と大阪の二地域で調査を行い、その比較を試みる。

<担当者>

研究分担者

渡辺 友左	（言語行動研究部長）
江川 清	（言語行動研究部主任研究官）
米田 正人	（言語行動研究部第二研究室員）
杉戸 清樹	（言語行動研究部第一研究室員）
堀江よし子	（言語行動研究部第二研究室研究補助員）
佐藤 亮一	（言語変化研究部第一研究室長）
沢木 幹栄	（言語変化研究部第一研究室員）
田中 望	（日本語教育センター日本語教育研修室員）

研究協力者

日向 茂男	（日本語教育センター日本語教育教材開発室員）
浜中 武彦	（金蘭短期大学教授）

吉田弥寿夫	(大阪外国語大学教授)
倉谷 直臣	(大阪外国語大学助教授)
山本 進	(大阪外国語大学助手)
南 不二男	(広島大学教授)
徳川 宗賢	(大阪大学教授)
杉藤美代子	(大阪樟蔭女子大学教授)
芳賀 純	(筑波大学助教授)
輝 博元	(大阪府立大学助手)

<本年度の経過>

1. 資料の収集

上記の目的を達成するために、比較的資料が得られやすいと考えられる座談の場面を選び、その全言語行動をビデオ装置(一部は8ミリカメラを併用)と録音器(ステレオ録音)によって観察記録した。一つの座談グループは原則として、司会者と4名の被調査者の計5名で構成した。この際、被調査者の組合せについては、性・年齢・出身地などの条件を考慮した。調査は、1)大阪府中河内を中心とする地区(9グループ、昭和52年9月6日～9日実施)。2)東京下町地区(6グループ、昭和52年8月3日～53年3月18日にかけて実施)で行った。なお、1グループあたりの談話時間は、およそ1～1.5時間であった。

2. 資料の整理と分析

1) 全座談グループの録音資料の第一次文字化(片カナ文節分かち書き)が終了した。また、大阪で採録された資料についてはネイティヴスピーカーによる点検がほぼ終了した。

2) 録画資料については、採録資料のうち1グループ分の行動の粗い観察記述が終了した。

3) 分析の仕方および分析例などについては下記の論文に発表した。

江川 清「談話行動の実験社会言語学的研究——目標と資料収集方法について」

江川 清「身ぶりの記述について」

杉戸清樹「身振りを記録する——「変位」の記録表試案」

米田正人「談話行動の計量的研究について」

以上『研究報告集1』（報告62）に収録。

今後、分析のレベルをより一層深めるとともに、別の地域——例えば、大阪府和泉地区、東京都山の手地区など——で資料を補充する予定である。

日本語教育のための基本的な言語能力の測定に関する研究

（代表 野元菊雄）（特定研究2）

<研究目的>

外国人に日本語を効果的に習得させるには、習得すべき日本語の言語能力について、その到達すべき目標を明らかにし、客観的な基準を設定することが重要な課題である。しかるに従来、言語能力の一方の面である書きことばを主とした言語構造の面については研究が重ねられてきたが、話しことば、言語行動などの実際の言語運用面についての研究はきわめて不十分といわざるを得ない。現実の話しことばの実態の把握なくしては、能力測定の客観的な基準設定は不可能である。そのため本研究では、

1. 留学生などの日本語学習者の多くが日本の社会で接すると考えられる、日本人の知識階層を中心として、そのなまの言語行動のすべてを記録・録音、これに発話場面やコミュニケーション・ネットワークなどの情報を付加し、これに文型論的分析・社会言語学的分析等を加えて基本的資料を得る。
 2. 1で得られた資料に基いて、さらに言語教育の立場から分析を加え、日本語学習者に学習到達目標として求められる言語能力を明示し、客観的な能力測定の基準を立てる。
- ことを目的とする。

さしあたって、第1期は3か年を研究期間とする。

<研究担当者>

・代表者

野元菊雄（国立国語研究所日本語教育センター長）

・分担者

水谷 修（国立国語研究所日本語教育センター研修室長）

志部昭平（ # # 第一研究室研究員）

日向茂男（ # # 教材開発室研究員）

田中 望（ # # 研修室研究員）

石井久雄（ # # # ）

杉戸清樹（ # 言語行動研究部第一研究室研究員）

真田信治（ # 言語変化研究部第一研究室研究員）

沢木幹栄（ # # # ）

大坪一夫（米加11大学連合日本研究センター助教授）

<実施の概要>

1. 言語行動の『24時間録音調査』を実施し、録音資料を得た。この調査は留学生が多く接すると考えられる大学生、大学院生、教師などの19人（東京12人、大阪7人）を対象とし、昭和52年9月の最後の1週間を調査期間として特定し（ただし日曜を除いた6日間）、各人がすべての時間帯にわたるように按分、各人1日1時間、延べ114時間（1時間×19人×6日）の録音を行った。
2. 1で得られた録音資料の文字化を行い、これに、発話場面情報・話し手情報・話し相手情報（これには話し手と相手との関係も含む）などを記録した。
3. 1で得られた録音資料と2で得られた文字化資料との対照、点検を行った。
4. 以上で得られた話しことばの資料（114時間分）は、既成の話しことば資料と比べて圧倒的に豊富である。たとえば、『話しことばの文型(1)、(2)』（報告18, 1960, 報告23, 1963）で用いられた資料に対して、資料の性格の

違いはあるが、約 2.5 倍の量に当たる。

『話しことばの文型(1)』対話資料	28時間31分48秒
『話しことばの文型(2)』独話資料	9 時間18分39秒
補助資料	6 時間14分48秒
計	44時間 5 分15秒

5. 以上の資料を主に文型・語彙・言語行動などの観点から分析・整理するに先だって、19人の対象者の中から一人を選び、その一部の試験的分析を行った。

<試験的分析結果の一部>

1. 4時間分について、文・文節に切って、それぞれを数えてみると、次の表に示すようになる。各テープに若干の聴取不能の文はあるが、これは省いた。() 内は%

テープ番号 1 文の文節数	021	022	024	025
1	140 (29.2)	20 (19.7)	40 (26.6)	245 (33.2)
2	93 (19.4)	14 (13.8)	31 (20.6)	158 (20.7)
3	96 (20.0)	21 (20.7)	30 (20.0)	120 (15.7)
4	45 (9.4)	7 (6.9)	25 (16.7)	86 (11.2)
5	34 (7.1)	4 (4.0)	13 (8.7)	47 (6.1)
6	19 (3.9)	11 (10.9)	7 (4.7)	34 (4.4)
7	14 (2.9)	2 (2.0)	2 (1.3)	18 (2.4)
8	18 (3.8)	4 (4.0)	1 (0.7)	12 (1.6)
9	7 (1.5)	3 (3.0)		15 (2.0)
10	5 (1.0)	3 (3.0)		5 (0.7)
11	2 (0.4)	1 (1.0)		5 (0.7)
12	2 (0.4)	3 (3.0)		4 (0.5)
13				3 (0.4)
14	1 (0.2)		1 (0.7)	1 (0.1)
15		3 (3.0)		
16		2 (2.0)		1 (0.1)
17	1 (0.2)	1 (1.0)		
18	1 (0.2)	1 (1.0)		
20				1 (0.1)

24				1 (0.1)
26	1 (0.2)			
27	1 (0.2)	1 (1.0)		
計	480 (100.0)	101 (100.0)	150 (100.0)	765 (100.0)
総 文 節 数	1,581	514	435	2,335
1 文の平均文節数	3.23	5.09	2.84	3.03

総計では1文平均3.25文節となる。この数は話しことばについて今まで
いわれてきたことと大体一致している。

各テープとも4文節までに80%前後の文が集中していて、話しことばの
文が短いことがここでも明らかとなった。

2. 二つのテープについて、文の表現意図から文を分類すると、次の表のよ
うになる。この分類は『話しことばの文型(1)』（報告18）（p.86～136）のワ
ク組みに従ったものである。数は文の実数で、（ ）内は左に全体に対す
る、右は、「その他（分類不能）」を除いたものに対する％である。

表現意図 \ テープ番号		024	025
1. 詠嘆表現	1.1 未分化表現	8 (5.4) (5.6)	19 (2.5) (2.5)
	1.2 やや分化した表現	2 (1.3) (1.4)	21 (2.7) (2.8)
2. 判叙表現	2.1 判断既定の表現	48 (32.0) (33.5)	180 (23.4) (24.1)
	2.2 判断未定の表現	9 (6.0) (6.3)	86 (11.1) (11.5)
3. 要求表現	3.1 質問的表現	29 (19.4) (20.3)	115 (15.0) (15.4)
	3.1.1 肯否要求の表現		
	3.1.2 選述要求の表現	8 (5.4) (5.6)	53 (7.0) (7.1)
	3.2 命令的表現		
	3.2.1 消極的行為要求の表現	5 (3.3) (3.5)	14 (1.8) (1.9)
	3.2.2 積極的行為要求の表現	7 (4.7) (4.9)	40 (5.1) (5.4)
4. 応答表現	4.1 未分化表現	17 (11.4) (11.9)	143 (18.6) (19.1)
	4.2 やや分化した表現	10 (6.7) (7.0)	76 (9.9) (10.2)
5. その他（分類不能）		7 (4.7) —	23 (2.9) —
計		150 (100.0)(100.0)	770 (100.0)(100.0)

この表によれば、2.1 判断既定の表現が非常に多いことはいうまでもないが、3.1.1 可否要求表現と、それに伴って、4 応答表現が多いことが明らかとなった。日常会話では、このように、事態を確認しながら話を進めていくことが多いものと思われる。

児童の概念形成過程における言語の役割とその教育効果に関する研究

(代表 林 大) (特定研究2)

<研究目的>

言語使用や語彙理解テストを通して、児童の使用する語の意味が、年齢とともに、どのように形成されてくるかという実態を明らかにするために、

(1) 3歳児～7歳児クラスの児童9名を対象にして、児童が母子の言語交渉の中で、どのような概念を表す語彙をどのような意味用法で使用するかを録音観察する。

(2) 3歳児～10歳児クラスの児童約500名を対象にして、範疇語、日常概念語の意味をどのように把握しているか、それらの意味構造を、絵図を含むテスト形式で明らかにする。

(3) 児童の書く作文や、幼児向け絵本には、どのような概念を表す語彙がどのように使用されているかの実態を明らかにする。

<調査の組織>

担当者

林 大	(国立国語研究所長)
村石 昭三	(言語教育研究部第一研究室長)
岩田 純一	(言語教育研究部第一研究室員)
村木新次郎	(言語体系研究部第二研究室員)
佐竹 秀雄	(言語計量研究部第二研究室員)
滝沢 武久	(電機通信大学教授)

調査園・調査校

東京都世田谷区立駒沢保育園 園長 松田 聡子

東京都世田谷区立砧保育園	園長	鳴海	しほ
東京都世田谷区立上北沢保育園	園長	本吉	圓子
東京都北区立赤羽西保育園	園長	吉田	義子
東京都北区立豊島北保育園	園長	是永	睦子
東京都北区立十条仲原幼稚園	園長	増田	登
東京都葛飾区・明昭第二幼稚園	園長	関口	素臣
東京都江東区・亀戸幼稚園	園長	山内	昭道
東京都北区立としま幼稚園	園長	滝沢豪一郎	
東京都北区・道灌山幼稚園	園長	高橋	系吾
東京都北区立豊島西小学校	校長	小嵩	貞子
東京都北区立梅木小学校	校長	久保田	保
東京都府中市立府中第六小学校	校長	吉田	英男

また、児童の録音観察調査に関しては、9名の児童の家庭の協力を得た。

＜調査の概要＞

上記の調査のうち、主として(2)の範疇語、日常概念語に関するテスト結果について概要を述べる。すなわち、テストは76枚の絵図および3種の台紙を使用し、「仲間づくり」「自由分類」「絵カード選択」「制限分類」「カテゴリー」「語の意味定義」の諸課題が個別テスト（ただし、小学2年生および4年生は1部で集団テスト）形式で実施された。そして必要な整理分析の一部として、カテゴリー概念規準表および語の意味定義反応一覧表が作成された。

(1) カテゴリー概念規準表

a. 手続き：提示例として、「“どうぶつ”って知っている？ “どうぶつ”にはどんなものがあるか、知っているだけ先生に教えてください。」と言い、発言をうながす。制限時間なし（集団テストのみ1範疇語平均3分）

b. 表の見方：ア.表中には、反応語、反応人数（％）が示してある。イ.各カテゴリーごとに反応人数の多い順に配列（ここでは「動物」5語に限る）

c. カテゴリー「動物」

3 歳児 (40名)			4 歳児 (39名)			5 歳児 (57名)		
人数	%	名前	人数	%	名前	人数	%	名前
17	42.50	ライオン	28	71.79	キリン	43	75.43	ゾウ
14	35.00	パンダ	23	58.97	ゾウ	37	64.91	ライオン
9	22.50	キリン	15	38.46	サル	34	59.64	キリン
9	22.50	ゴリラ	12	30.76	ライオン	33	57.89	サル
8	20.00	ウサギ	12	30.76	ウサギ	27	47.36	ウサギ
6 歳児 (54名)			7 歳児 (26名)			8 歳児 (106名)		
人数	%	名前	人数	%	名前	人数	%	名前
45	83.33	ゾウ	20	76.92	ゾウ	98	92.45	サル
44	81.48	キリン	20	76.92	ライオン	92	86.79	ライオン
35	64.81	ライオン	16	61.53	パンダ	88	83.01	トラ
34	62.96	パンダ	15	57.69	トラ	87	82.07	ゴリラ
33	61.11	サル	14	53.84	サル	86	81.13	ネコ

以上の「動物」のほか、植物、着るもの、果物、虫、道具、魚、花、鳥、野菜、履物、家具、楽器の13カテゴリーについて、年齢別、性別に分類された規準語彙を明らかにした。

(2) 語の意味定義反応一覧表

a. 手続き・提示例として、「“はさみ” とはどんなもの？ “はさみ” ってなあに？」と問いかけ、発言をうながす。制限時間なし。

b. 表の見方：ア.表中には、定義内容、反応人数（%）が示してある。定義内容は異なる陳述形式（例、チョキチョキ／チョキチョキと切るもの）ごとに登録してある。イ.各語ごとに反応人数の多い順に配列（ここでは「はさみ」5定義に限る）

c. 意味定義「はさみ」

3 歳児 (43名)			4 歳児 (39名)		
人数	%	定義内容	人数	%	定義内容
9	20.93	（指でハサミの形）	19	48.72	切るもの

9	20.93	切るもの
6	13.95	紙を切るもの
6	13.95	チョキチョキ
4	9.30	チョキチョキ切るもの

9	23.08	紙を切るもの
2	5.13	チョキチョキ切るもの
2	5.13	チョキチョキ切る（動作を含む）
1	2.56	チョキチョキ

5歳児（58名）

人数	%	定義内容
27	46.55	切るもの
9	15.52	紙とか切るもの
5	8.62	切るもの（動作を含む）
2	3.45	何か切るもの
1	1.72	ジョキジョキって切るもの

小1（32名）

人数	%	定義内容
15	46.88	切るもの
10	31.25	紙を切るもの
2	6.25	何か切るもの
1	3.13	切るやつ（動作を含む）
1	3.13	切るとき使うの

6歳児（46名）

人数	%	定義内容
21	45.65	切るもの
17	36.96	紙を切るもの
2	4.35	切るもの（動作を含む）
1	2.17	物を切るもの
1	2.17	物を切るときに使うもの

小4（30名）

人数	%	定義内容
10	33.33	紙を切るもの
8	26.67	物を切るもの
7	23.33	切るもの
2	6.67	紙やきれを切るもの
1	3.33	紙とか物を切るもの

以上の「はさみ」のほか、おかね、コップ、くつ、みかん、けんか、お父さん、お母さん、鳥、乗り物、花、動物の12語について調べ、年齢別に分類された定義反応一覧表を作成し、規準反応を明らかにした。

表現法の全国的調査研究（代表 飯豊毅一）（総合研究A）

<研究目的>

国立国語研究所編『日本言語地図』（報告30—1～30—6）の完結によって、主として語彙に関する精密詳細な全国的分布状況が明らかにされた。しかしながら、表現法に関しては、臨地調査にもとづく全国的規模の詳細な調査報告はほとんどなく、将来、この方面についての大規模な調査研究を行うことが

必要と考えられる。

51年度には、「表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究」（代表 飯豊毅一、総合研究B）の題目のもとに科学研究費補助金の交付を受け、この種の全国的な調査のあり方について総合的に検討した。

上記の研究は、この研究の結果を踏まえて、国立国語研究所が本部となり、全国各地の方言研究者の協力のもとに大規模な調査研究を行い、表現法の全国的地域差を明らかにすることを目的とする。

<調査の組織>

各地区担当の分担者

加藤 正信	東北大学文学部助教授	（北海道・東北地区分担）
井上 史雄	東京外国語大学助教授	（ 同 上 ）
日野 資純	静岡大学人文学部教授	（関東・中部地区分担）
馬瀬 良雄	信州大学人文学部教授	（ 同 上 ）
佐藤 茂	福井大学教育学部教授	（北陸・近畿地区分担）
佐藤 虎男	大阪教育大学教授	（ 同 上 ）
室山 敏昭	広島大学文学部助教授	（中国・四国地区分担）
吉田 則夫	高知大学教育学部助教授	（ 同 上 ）
奥村 三雄	九州大学文学部助教授	（九州・沖縄地区分担）
仲宗根政善	沖縄国際大学講師	（ 同 上 ）

各都道府県担当の協力者

国立国語研究所地方研究員（別項参照、ただし、上記の研究分担者を除く）および、下記の各氏。

下野 雅昭	東北大学大学院学生（宮城県担当）
上野 勇	国立国語研究所前地方研究員（群馬県担当）
福島 明	東京外国語大学学生（埼玉県担当）
天野 義広	福井県立道守高等学校教諭（福井県担当）
加藤 和夫	東京都立大学大学院学生（ 同 上 ）
荻原 繁里	長野県立辰野高等学校教諭（長野県担当）
福田 宗彦	大阪教育大学大学院学生（京都府担当）

茂田 恵 広島大学大学院学生（広島県担当）

稲川 順一 九州大学文学部助手（福岡県担当）

杉村 孝夫 福岡教育大学講師大（分県担当）

国立国語研究所所属の担当者

飯豊 毅一 （言語変化研究部長）

佐藤 亮一 （言語変化研究部第一研究室長）

真田 信治 （言語変化研究部第一研究室員）

沢木 幹栄 （言語変化研究部第一研究室員）

<実施の概要>

1. 本部（国立国語研究所）所属の研究者が準備調査票の原案を作成し、9月20日から3日間、東京で分担者会議を開き、調査票の内容について具体的に検討した。
2. 1の結果にもとづいて「表現法の全国調査のための準備調査票」（B5版52ページ）を作成した。内容は、「あいさつ」「命令・禁止・義務」「強調・詠嘆」「意志・勧誘・希望」「推量・伝聞・比況」「否定」「疑問・反語」「過去・回想」「アスペクト」「仮定・確定」「可能」「使役」「やり・もらい」「待遇」の各表現に関するもので、項目総数は、のべ約350である。
3. 全国各地の研究分担者・研究協力者に、この調査票による臨地調査を依頼した。また、本部所属の研究者も、この調査票の内容に検討を加えるために、全国主要地点で比較的詳しい調査を行った。なお、この研究は、「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」（別項参照）と相互に関連させつつ実施した。調査地点総数は、両研究を合わせて全国計170地点であった。

<今後の予定>

本部では、次年度分として申請中の本研究に関する科学研究費補助金の交付を待って、この調査結果の整理・分析を行い、本年度に行った準備調査についての報告書を刊行する予定である。なお、本研究は、当初、申請の際には、第2年次・第3年次に本調査（全国計1,000地点）を実施する3か年計

画であったが、実際には準備調査の段階にとどまることとなった。この準備調査の結果を生かすべく、今後、新たな研究計画を立案したい。

幼児・低学年児童の語彙調査（代表 芦沢 節）（一般研究A）

<研究目的>

本研究は現代の幼児・低学年児童が「どれだけの語彙量を持つか」「どんな語彙体系を持つか」を明らかにすることを目的とする。このため、本年度は、3年計画第二年次調査として、下記の四つの継続研究に関する「普通児の語彙調査」を実施する。

- (1) 「語彙使用調査」：特定の時期に言語及び言語行動を録音追跡し、累積語彙量、語彙使用を個人別に明らかにする。
- (2) 「24時間語彙調査」：1日（24時間）の語彙使用を通してみた言語生活のパターンを明らかにする。
- (3) 「語彙連想調査」：67頭音およびカテゴリー別語彙連想調査を行った上、(1)(2)調査結果との関係を明らかにする。
- (4) 「言語生活アンケート調査」：TVや絵本への接触、家族との言語交渉、友人との遊びを通してみた言語習得要因を明らかにする。

<調査の組織>

担当者

芦沢 節	（言語教育研究部長）
村石 昭三	（言語教育研究部第一研究室長）
大久 保愛	（言語教育研究部第一研究室主任研究官）
岩田 純一	（言語教育研究部第一研究室員）
斎藤 秀紀	（言語計量研究部第三研究室主任研究官）

調査校

東京都豊島区立西小学校	校長 小嵐 貞子
東京都北区立梅木小学校	校長 久保田 保
東京都府中市立府中第六小学校	校長 吉田 英男

また、幼児調査に関しては、8名の幼児の家庭の協力を得た。

<調査の概要>

- (1) 「語彙使用調査」：8名の幼児（5歳児）を対象にして、好きな絵本、TV等を話題にした面接語彙調査、および物の名前図鑑を利用したの絵本ポインティング調査を実施し、各幼児別に使用語彙データを集成した。
- (2) 「24時間語彙調査」：(1)と同一幼児を対象にして、家庭生活、友だちとの遊びを主にした24時間語彙調査を実施し、幼児別に使用語彙データを集成した。
- (3) 「語彙連想調査」：67頭音およびカテゴリー語彙連想調査を上記の8幼児および小学校児童200名について実施し、連想語彙データを集成した。児童の連想語彙数と知能指数との相関係数はテスト種類により、 $-0.153 \sim +0.566$ の間に検出された。
- (4) 「言語生活アンケート調査」：上記の幼児、児童のすべてに対して調査を実施し、他調査との交差集計に必要なデータを得た。

現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究

（代表 斎賀秀夫）（一般研究A）

<研究目的>

漢字の重要度の段階づけを試みるとともに、その妥当性を実態調査・意識調査によって確かめ、これらの研究成果の上に立って、現代語表記における漢字の役割を実験によって明らかにしていくことを目的とする。

<研究組織>

この研究には、言語計量研究部に属する8名の研究員が参加し、下記のように研究を分担した。

斎賀秀夫（研究代表者）	調査研究の総括
野村雅昭 佐竹秀雄	漢字使用の意識についての研究
土屋信一 中野洋 鶴岡昭夫	//
斎藤秀紀 田中卓史	漢字使用の数理言語学的分析

なお、東北大学文学部の加藤正信助教授に、意識調査について協力を得た。
＜実施の概要＞

1. 漢字使用の意識についての研究

(1) 表記主体者の意識と表記の実態を調べるために意識調査を実施した。

・調査対象：教員 145 名，一般公務員76名，学生78名，主婦55名，その他90名，（計441名）

・調査地：仙台，東京，静岡，岐阜

(2) 調査した結果については，コンピュータを用いて全体の基本集計を出力した。これによって，

・表記のゆれは個人差が大きいだけでなく，個人の内部においても文脈や場面による差が存在すること

・複数の漢字表記が可能な語では，その表記の際に迷いが生じやすいこと

・表記の正誤・可否を決定する基準は，個人によって，また，語によって多様であること

などが明らかになった。

2. 漢字使用の数理言語学的分析

(1) 現代語表記の変容にかかわると考えられる諸条件（語種，品詞，頻度等）をコントロールし，それに応じた各種の漢字仮名まじり文を出力する実験を行った。

(2) これによって，漢字仮名まじり文の表記のレベルを設定することが可能になり，同時に教科書，雑誌などの文の種類と表記のレベルとの関係が考察できるようになった。

また，この研究に関連するものとして，

「表記のユレの数量化（野村雅昭）」（『計量国語学』(11巻1号)）

「表記行動のモデル化（佐竹秀雄）」（国語学会春季大会口頭発表）

を発表した。

雑誌用語の変遷に関する研究（代表 宮島達夫）（一般研究B）

<研究目的>

本研究の主要目的は、近代における用語・用字の変遷、特に戦後の国語改革がこれにおよぼした影響を知ることである。このため、戦前から現在までつづいている主要な雑誌について、

表記（漢字含有率、かなづかい、送りがな）

用語（漢語・外来語の比率、個々の語の使用率、語構成）

文法・文体（文語的表現の消失と談話語的表現の進出）

等の点について調査する。

<研究組織>

言語体系研究部に属する下記の4名が参加した。

高橋 太郎 （第一研究室長）

工藤 浩 （第一研究室員）

宮島 達夫 （第二研究室長）

村木新次郎 （第二研究室員）

<実施の概要>

調査の目標は、雑誌『中央公論』から10年おきに、のべ1万語を抽出して、雑誌における用語・用字の変遷をみることである。本年度は基礎資料の作成に重点をおいた。したがって、まだ、とくにまとまった研究成果とよぶべきものはない。本年度末における作業の進行状況は、つぎのとおりである。

	採集箇所抽出	単位きり	カード作成	単語の採集	五十音順配列	単語の集計	文字の集計
1906年	○	○	○				○
1916年	○	○	○				
1926年	○	○	○	○			
1936年	○	○	○				
1946年	○	○	○				

1956年	○	○	○	○	○	○	○
1966年	○	○	○	○	○		○
1976年	○	○	○	○	○	○	○

なお、カード作成と並行しておこなった調査の結果、『中央公論』における文語から口語への変化は、明治後期から大正にかけて比較的ゆるやかに、歴史的かなづかいから現代かなづかいへの変化は、戦後のみじかい時期におこったことがわかった。

日本語教育研修の実施

A 目 的

日本語教育センターは、日本語教育振興の社会的要請に応えるために、専門家としての日本語教員の育成と、その資質能力の向上とを目的として、教員研修の機会と場を提供している。本年度からは、従来は夏季の短期研修、公開講座に加えて、日本語教育長期専門研修を発足させた。この長期研修は、研究所の調査・研究の成果をも十分に取り入れた高度の教育を実施し、優れた日本語教育・日本語研究の人材を育成しようとするものである。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研修室

センター長 野元菊雄 日本語教育研修室長 武田 祈 (52.4.18 日本語教育教材開発室長) 水谷 修 (52.4.18 以降) 研究員 田中 望 石 井久雄 研究補助員 高野美智子 事務官 田島正幸

なお、研修事務について村上のみ子他の協力を得た。

C 本年度の経過

I 日本語教育長期専門研修

昭和52年度日本語教育長期専門研修は、昭和52年5月23日より53年2月28日までの約9か月間にわたって行われた。

1. 募集方法及び応募者の資格

今回は初年度だったこともあって、やや出足が遅れ、52年4月16日に案内書を公表し、募集を開始した。案内書は、各大学、日本語教育機関、日本語教育関係団体等、約600機関に配布された。また、毎日新聞ほかいくつかの新聞にもこの研修会についての記事が掲載され、応募者中のかかなりの数の者

が、これらの記事によって、研修会の開催を知ったようである。

応募者の資格については、52年度は、四年制大学卒業以上の学歴を持つこと、及び、大学（指導教官）又は日本語教育機関、日本語教育関係団体等からの推薦のあることの二つを条件とした。

2. 研修施設

研修は国立国語研究所日本語教育センターの六つの研修室（54名用大研修室1、24名用中研修室2、18名用小研修室3）を使って行われた。通常の講義には主に中研修室を使い、研修生が自主的に行う共同研究及び教育実習などには小研修室を使った。また、大研修室は、開講式、修了式などや、研究所研究員も聴講した特別講義などの際に使用した。

研修生が休み時間、放課後などに利用する控室として、長期研修生室をもうけた。ここには、現在はまだごく少数であるが、基本図書がそなえつけてある。

そのほか、研修生が研修期間中に利用できる施設として、国語研究所図書館がある。この図書館は、もともと研究所研究員のための専門図書館であるため、研修生の利用にはいくつかの問題があったが、52年度は毎週月曜と木曜の研修終了時から閉館（5時15分）まで、研修生に開放され、閲覧、貸し出しが行われた。

なお、52年11月にLL教室の一部が完成した。現在使用可能なのは、18ブースで53年度には30ブースになる予定である。各ブースには、ビデオ及び音声のテープレコーダーが付き、レスポンス・アナライザーを備えた最新式のものであるが、52年度研修では、実際に活用されるにはいたらずに終わった。

3. 研修年間日程

研修日程は次の表の通りである。

52年4月16日 案内書公表、募集開始

5月7日 募集締切り

5月13日 第一次選考（筆記）

5月18日 第二次選考（面接）

5年23日 受講登録

5月24日 開講式, ガイダンス

5月25日 研修(第一学期)開始

7月15日 研修(第一学期)終了

7月16日より夏季休業

9月1日 研修(第二学期)開始

11月18日 研修(第二学期)終了

11月28日 研修(第三学期)開始

12月20日 国語研究所創立記念日のため休業

12月21日より冬季休業

53年1月9日 研修(第三学期)再開

2月25日 研修(第三学期)終了

2月28日 修了式

4. 研修内容

講座名及び講師

開講特別講義(文字と語彙を中心として)	齋賀 秀夫
同 上 (語法と英語を中心として)	水谷 修
同 上 (日本語教師の資質と能力をめぐって)	水谷 修
共同研究への手引 (1) 日本語の母音をめぐって	石井 久雄
同 上 (2) 言語調査をめぐって	野元 菊雄
日本語学概論 岩淵悦太郎	日本語学研究 岩淵悦太郎
日本語音声研究 水谷 修	実験音声学 上村 幸雄
対照音声学 城生伯太郎	日本語文字論 林 大
日本語文法 北原 保雄	日本語表現論 宮地 裕
# 久野 暲	日本語語彙論 林 四郎
# 鈴木 重幸	辞書研究 倉持 保男
# 南 不二男	# 武部 良明
日本語史研究 石井 久雄	日本語方言学 徳川 宗賢
心理言語学 芳賀 純	社会言語学 野元 菊雄

言語の対照研究	志部 昭平	文章構成法	林 巨樹
表記法研究	武部 良明	話し言葉研究	大石初太郎
日本語特別研究	高橋 太郎, 工藤 浩, 宮島 達夫, 村木新次郎, 渡辺 友左 中村 明, 杉戸 清樹, 江川 清, 米田 正人, 高田 正治 飯豊 毅一, 佐藤 亮一, 真田 信治, 沢木 幹栄, 飛田 良文 梶原滉太郎, 芦沢 節, 村石 昭三, 大久 保愛, 岩田 純一 斎賀 秀夫, 土屋 信一, 中野 洋, 鶴岡 昭夫, 野村 雅昭 佐竹 秀雄, 斎藤 秀紀, 田中 卓史		
日本語教授法	浅野 鶴子	日本語教育事情	椎名 和男
"	木村 宗男	"	富田 隆行
"	鈴木 忍	日本語教育と文学	吉田弥寿夫
"	小出 詞子	日本語教育教材開発研究	日向 茂男
日本語教授法研究	倉谷 直臣	日本語教育能力評価法	田中 望
"	斎藤 修一	修了論文指導	岩淵悦太郎
"	阪田 雪子		大坪 一夫
"	佐治 圭三		上野田鶴子
"	玉村 文郎	共同研究	
"	寺村 秀夫	日本語教育機関見学	
"	水谷 修	・東京外国語大学付属日本語学校	
"	E. H. ジョーダン	・米加十一大学連合日本研究センター	
		・慶応義塾大学国際センター	
		(引率・武田 祈, 田中 望, 石井久雄)	

なお、国立国語研究所日本語教育センターとしては、外国人学習者に対する日本語教育そのものを事業としていないので、研修科目の中に教育実習を組み込むことはできない。しかし、本年度は、明治大学で4名、ソニーLLで2名、日本国際教育協会で1名等、教育実務にあたった者があるほか、個人教授を含め、ほとんどすべての研修生がなんらかの形で日本語教育の実験を経験した。

上記の研修科目のほかに、夏季休業中に次の三つ、第二学期に一つ、計四

つの特別研究を行った。

夏季特別研究 石井 久雄

M. Bierwisch 著, MODERN LINGUISTICS 講読。

同 上 田中 望

「学友会教科書」及び「Intensive Course in Japanese」のビデオ版解説の作成のための準備。

同 上 日向 茂男

意味の比較。柴田他著「ことばの意味」、徳川・宮島著「類義語辞典」を参考に意味の問題を扱う。

秋季特別研究 水谷 修

スピーチクリニック参加研修生各自の発音、イントネーションなどの矯正。

5. 研修生

昭和52年度の募集は昭和52年5月7日に締切り、応募者は44名であった。次の選考経過により、18名の受容れを決定した。

第一次選考 昭和52年5月13日実施、18日発表。

日本語の理解・表現に関する、および英語の理解に関する筆記試験を課した。試験時間3時間45分。受験者43名、合格者23名。

第二次選考 昭和52年5月18日実施、19日発表。

面接。発音・聴解を含む。受験者23名、合格者18名。

この18名はいずれも受講手続を取ったが、うち1名が途中で受講を辞退し、修了に至ったのは、次に掲げる17名である。なお、国際交流基金の長期招聘による1名を聴講生として受け入れ、全課程にわたって受講した。

修了者氏名	性別	年齢	学 歴 等	大学(院)での専攻
石井 明	男	29	九州大学法学部卒業	英米法学
岡崎 健	男	28	武蔵大学大学院経済学研究科在学	経済学
草場 裕	女	31	青山学院大学大学院文学研究科在学	日本語学

久保田芳広	男	30	慶応義塾大学大学院社会学研究科在学	社会学
坂根 慶子	女	27	早稲田大学教育学部卒業	社会科学
坂本 正	男	25	東京理科大学工学部卒業	経営工学
嶋田千寿子	女	24	福岡教育大学教育学部卒業	日本語教育学
進藤由紀子	女	23	東京女子大学文理学部卒業	社会学
瀬戸口 修	男	25	広島大学大学院文学研究科修了	国語学
高木 節子	女	30	お茶の水女子大学文教育学部卒業	国文学
橘 礼子	女	30	大阪女子大学文学部卒業	国文学
安次嶺佳子	女	28	立教大学社会学部卒業	社会学
藤井幸人子	女	29	北海道大学部卒業	印度哲学
松本 庸子	女	24	東京教育大学文学部卒業	言語学
持田 節子	女	24	早稲田大学教育学部卒業	教育心理学
森川 英子	女	24	上智大学文学部卒業	ドイツ文学
山上 明	男	25	東京外国語大学外国語学部卒業	スペイン語学
聴 講 生				
V. N. Balambal	国籍インド 女	44	デリー大学中国日本研究科講師	

II 日本語教育夏季研修

1. 目的

外国人に対する日本語教育の内容・方法について、ごく短期間に集中的に研修を行おうとしたものである。日本語教育の研究もしくは実務に現に従事していてその経験が豊かなもののための現職者研修と、経験がまだ浅いか全くないものための初級研修と、二つに分け、その二つを東京および大阪においてそれぞれ行った。

2. 日程および会場

東京会場

日程 昭和52年7月26日(火)～7月30日(土) 5日間

午前9時～午後4時

会場 国立国語研究所

大阪会場

日程 昭和52年 8月 4日(木)～8月 8日(月) 5日間

午前9時～午後4時

会場 大阪府中小企業文化会館（大阪市天王寺区上汐町5丁目25番地）

3. 講義題目

現職者研修 東京会場

言語表現と文化背景	野元 菊雄	時間 90分
日本語音声の調音過程——X線映画による	高田 正治	90分
文 字	武部 良明	90分
「文法性」と「適切さ」	寺村 秀夫	90分
文型学習	河原崎幹夫	90分
学習困難な語彙	池田摩耶子	90分
比喩表現について	中村 明	90分
学習評価	東 洋	90分
演 習 I 文型学習上の問題	河原崎幹夫	120分
II 文 字	武部 良明	120分
III 学習困難な語彙の問題	池田摩耶子	120分
IV 言語表現と文化背景の問題	野元 菊雄	120分
総括討論	野元 菊雄	90分

現職者研修 大阪会場

言語生活とその調査	野元 菊雄	時間 90分
日本語と漢字	林 大	90分
形容詞の語彙分類	吉田 金彦	90分
対照言語学	志部 昭平	90分
言語地理学	徳川 宗賢	90分
教育評価の諸問題	大沢 春吉	90分
教材研究	倉谷 直臣	90分
日本語教育の歴史	吉田弥寿夫	90分
演 習 I 学習困難な語彙の問題	宮地 裕	120分

Ⅱ	学習者のおちいりやすい誤用例	佐治 圭三	120分
Ⅲ	文型学習上の問題	寺村 秀夫	120分
Ⅳ	言語表現と文化背景の問題	倉谷 直臣	120分
	総括討論		90分
初級研修 東京会場			
	日本語教育概観	林 大	時間 90分
	日本語教授法概説	木村 宗男	120分
	音声と音声教育	{ 大坪 一夫 志部 昭平 杉原 正勝 福地 務	300分
	文字と文字教育	斎賀 秀夫	90分
	文法と文法教育	鈴木 忍	120分
	語彙と語彙教育 I	宮島 達夫	90分
	Ⅱ	西尾 寅弥	120分
	語彙から文法へ	石井 久雄	90分
	視聴覚教育	{ 日向 茂男 田中 望	180分
	テスト	田中 望	90分
初級研修 大阪会場			
	日本語教育概観	吉田弥寿夫	90分
	日本語教授法	小出 詞子	120分
	音声と音声教育 I	{ 大坪 一夫 杉藤美代子 間瀬 英夫 志部 昭平	180分
	Ⅱ	和田 実	120分
	文字と文字教育	武田 祈	90分
	日本語と漢字	林 大	90分

文法と文法教育	I	寺村 秀夫	180分
	II	佐治 圭三	90分
表現論の課題		宮地 裕	120分
視聴覚教育		{ 日向 茂男 }	120分
		{ 田中 望 }	
テスト		{ 倉谷 直臣 }	90分
		{ 丸本 隆 }	

4. 参加者

定員は、東京会場・大阪会場とも現職者研修60名、初級研修100名である。
応募者の資格として、次の条件がある。

(a)(b)いずれかの条件を満たし、日本語教育機関、日本語教育関係団体、または大学等からの推薦があるもの。

現職者研修——

(a)日本語教育の研究もしくは実務に現に従事していて、その経験が原則として2年を越えるもの。

(b)日本語教育の研究もしくは実務に現に従事していて、初級研修を既に修了したもの。

初級研修——

(a)日本語教育の研究もしくは実務に現に従事していて、その経験が2年に満たないもの。

(b)大学4年在学以上またはそれに準ずる学歴を有し、日本語教育の研究もしくは実務に従事しようとする計画があるもの。

昭和52年度は、初級研修の応募者に(a)のものが非常に少なく、それは現職者研修に繰入れることとした。したがって、現職者研修は経験者研修、初級研修は未経験者講座、といった色彩があからさまになることになった。

応募は昭和52年6月11日(土)に締切り、その応募状況、参加者決定状況、参加状況などは、次のようであった。

現職者研修 東京会場

○ 応募者数	40
参加決定者数	40
うち初級研修応募者から繰入れた者	6
不参加決定者数	6
うち初級研修へ繰入れた者	2
○ 全日程にわたって参加した者	36
参加証明書交付者数	36
現職者研修 大阪会場	
○ 応募者数	34
参加決定者数	34
不参加決定者数	0
○ 全日程にわたって参加した者	24
参加証明書交付者数	19
初級研修 東京会場	
○ 応募者数	173
参加決定者数	103
うち現職者研修応募者から繰入れた者	2
不参加決定者数	72
うち現職者研修へ繰入れた者	6
○ 全日程にわたって参加した者	97
参加証明書交付者数	96
初級研修 大阪会場	
○ 応募者総数	95
参加決定者数	63
不参加決定者数	32
○ 全日程にわたって参加した者	57
参加証明書交付者数	53

5. 運営委員会

集中的な研修を円滑に運営するため、東京会場、大阪会場それぞれに、国

立国語研究所外に運営委員 5 名を委嘱した。運営委員会は、運営委員 5 名と国立国語研究所日本語教育センター内 4 名とによって、構成された。

東京会場運営委員	大阪会場運営委員	日本語教育センター
伊藤 芳照	佐治 圭三	野元 菊雄
大坪 一夫	玉村 文郎	水谷 修
木村 宗男	寺村 秀夫	田中 望
鈴木 忍	宮地 裕	石井 久雄
望月 孝逸	吉田弥寿夫	

なお、社団法人日本語教育学会および大阪外国語大学には、研修の運営および実施に当たって協力を仰いだ。

Ⅲ 日本語教育公開講座

1. 目的

日本語および日本語教育に関心のある学生および社会人広く一般に対し、その知識を整理し発展させる契機を、提供しようとしたものである。

2. 日程および講義題目

昭和52年度は、年度中に 4 回、土曜日午後に 2 時間ずつ開催した。会場は第 1 回および第 2 回は国立国語研究所講堂、第 3 回および第 4 回は国立国語研究所日本語教育センター第一研修室であった。日程および講義題目は、次のとおりである。

昭和52年11月26日（土）	午後 2 時～ 4 時	
日本語教育と国語教育		岩淵悦太郎
昭和52年12月 3 日（土）	午後 2 時～ 4 時	
日本語教育の現状		水谷 修
日本語の文字		斎賀 秀夫
昭和53年 3 月 4 日（土）	午後 2 時～ 4 時	
日本語教授の実際		上野田鶴子
日本語の音声		野元 菊雄
昭和53年 3 月11日（土）	午後 2 時～ 4 時	
日本語の特質		林 大

D 今後の予定

53年度は52年度と同じく、長期専門研修，夏季研修，公開講座の三種の研修を実施する。研修実施期日，実施形態は大きな変更はしないが，教育内容に関してはより効果的なものに改善して行く。

日本語教育教材および教授資料の作成

A 目 的

日本語教育における有効適切な教材の開発を旨としてモデル教材を作成し、また指導上の参考に資するために日本語教育の基礎的知識に関する教授資料を刊行する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育教材開発室

センター長 野元菊雄 室長 武田 祈 研究員 日向茂男

C 本年度の作業

1 日本語教育教材および教授資料の作成

日本語教育教材および教授資料の作成

日本語教育指導参考書4「日本語の文法(上)」を大阪外国語大学教授寺村秀夫氏に依頼し、作成刊行した。(15ページ参照) また、53年度刊行予定の「日本語教育の評価法」(仮題)について執筆を依頼した。

2 日本語教育映画の制作

今年度制作した日本語教育映画の題名および規格等は、次のとおりである。

イ 題名

「どちらが好きですか」—比較・程度の表現—

「もみじが とても きれいでした」——です、でした、でしょう——

「きょうは おめが ふっています」——して、している、していた——

ロ 規格等

16ミリ、カラー、トーキー、1巻5分もの3巻

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

今年度制作された3巻のそれぞれの内容とねらいは次のとおりである。

「どちらがすきですか」

この映画では、比較・程度を表す言い方を取り上げるとともに、「——は——が——です」の文型による表現の理解をめざしている。他に「どちら」「どれ」「どんな」「どの」等の用法、また、「こちら」「そちら」「あちら」「こっち」「そっち」「あっち」の使用上の違い等にも触れている。

言語場面としては、訪問を取り上げ、最初に青年男女の対話、続いて青年と訪問先の家族の会話を描いている。

「もみじが とても きれいでした」

この映画は、先に制作された形容詞、形容動詞の導入映画（「やすすくないです たかいです」「しずかなこうえんで」）を引き継ぐもので、学習事項の復習と新しい展開をめざしている。事物の属性を表す言い方から、感情・気持の表現の方に語彙を拡張し、「です」「でした」「でしょう」との組み合わせで表現を豊かにしている。

映画は、ある家族の一日の小旅行を追いながら、きれいなもみじと楽しい一日を描写している。

「きょうは あめが ふっています」

この映画は、一般動詞の導入映画（「なにをしましたか」）を土台として、動作・作用の推移・連続を表す言い方（「～て」）と動作・作用の継続・状態を表す言い方（「～ている」）を中心的な学習項目としている。

舞台は、ある雨の日曜日の学生寮で、前半は、学生が手紙を書く形で、後半は、学生どうしの会話で進行する構成である。

本年度の映画の制作にあたっては、日本語学習映画等企画協議会を設け、次の諸氏を委員に委嘱して、主題・シナリオの決定、制作の指導等についての協力を得た。

石田敏子（国際基督教大学専任助手）

川瀬生郎（東京外国語大学附属日本語学校教授）

木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

窪田富男（東京外国語大学教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

なお、49年度制作映画の解説書を、「これはかえるです（こそあど＋は——です）」を日向茂男、「さいふはどこにありますか（こそあど＋が——ある）」については日向茂男・田中望、「やすすくないでしたかいです（形容詞とその活用導入）」は日向茂男・石井久雄がそれぞれ分担執筆し刊行した。

3 母語別学習教材作成準備委員会の開催

母語別学習辞典作成のために母語別学習教材作成準備委員会を設け、昭和52年度及び昭和53年度の2か年にわたって、基本的な事項について検討することになった。昭和52年度は、会議を3回開催し、日本語教育中級教材としての母語別学習辞典の性格、日外辞典か外日辞典かの問題点、外国語の範囲、語彙数等について検討した。

母語別学習教材作成準備委員会には、所外委員10名、所内委員5名を依頼した。氏名は次のとおりである。

所外委員

伊藤芳照（東京外国語大学附属日本語学校教授）

梅田博之（東京外国語大学A・A研究所教授）

加藤彰彦（実践女子短期大学教授）

窪田富男（東京外国語大学特設日本語科教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

佐治圭三（大阪女子大学教授）

玉村文郎（同志社大学助教授）

土田 滋（東京外国語大学A・A研究所助教授）

富田隆行（国際交流基金日本語研究部日本語課長）

西尾寅弥（群馬大学教授）

所内委員

野元菊雄（日本語教育センター長）

上野田鶴子（日本語教育センター第二研究室長）

水谷 修（日本語教育センター日本語教育研修室長）

武田 祈（日本語教育センター日本語教育教材開発室長）

村木新次郎（言語体系研究部第二研究室員）

D 今後の予定

日本語教授資料作成のための調査研究及び計画の立案にあたる。モデル教材としての日本語教育教材開発については、センターにおける教材開発実験室、録音教材編集室の機器の整備充実に伴い、開発のための実験研究を行う。

昭和53年度は、日本語教授資料として、「日本語教育指導参考書 5 日本語の文法(下)」,「日本語教育指導参考書 6 日本語教育の評価法」(仮題)を刊行する。なお、そのほかに54年度刊行予定のものについて原稿の執筆を依頼する予定である。

日本語教育映画基礎編は、5分もの3巻を予定している。解説書については52年度に引き続き執筆刊行する予定である。

母語別教材作成準備委員会は52年度に引き続き開催し、54年度から実際に具体化する予定の母語別学習辞典作成のための検討を行う。

国語辞典編集準備委員会

昭和52年度から、国語辞典の編集に関して準備委員会が設けられることになったが、同委員会発足に先立って、6月14日、辞典出版の関係者による懇談会を開き、辞典を国家機関として編集することについて出版界の意見を求めた。

懇談会の出席者は次の通りである。（敬称略）

岩波書店	秋田 弘	三省堂	倉島 節尚
学習研究社	住谷 春也	小学館	今井 清治
角川書店	佐野 正利	尚学図書	倉島 長正
研究社	河野 亨雄	大修館書店	佐伯 俊雄
講談社	近藤 禎之	新潮社	片岡 久（書面）

当日の意見は大要次のような項目にわたった。

国の機関が行う辞典編集の性格、辞典の内容、規範性、基礎的な資料としての用例集の必要、その他。

編集準備委員会は、外部委員として、

荒 正人	法政大学教授
岩淵悦太郎	前国立国語研究所長
黒羽 亮一	日本経済新聞社 論説委員
見坊 豪紀	
阪倉 篤義	京都大学教授
田島 宏	東京外国語大学教授
松井 栄一	尚学図書言語研究所員
馬淵 和夫	筑波大学教授
山田 俊雄	成城大学教授
頼 惟勤	お茶の水女子大学教授

を委嘱し、これに所内委員として、林大、渡辺友左、飯豊毅一、芦沢節、斎賀秀夫、野元菊雄、高橋太郎、宮島達夫、中村明、佐藤亮一、飛田良文、土

屋信一，野村雅昭及び書記として田原圭子を加えた。

同委員会は11月8日に第1回（座長一岩淵委員），2月27日に第2回（所長進行）を開いた。第1回は『フランス語宝典』の編集状況についての情報提供のほか，自由討議を行い，第2回は，所長から明治33年前後の資料による用例採集を第1期作業とする試案を提示し，これについて質疑及び意見交換が行われた。

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和52年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図書

受入……2,630冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和 書	1531	290	423	41	2285
洋 書	213	28	104	0	345
計	1744	318	527	41	2630

蔵書冊数50,576 (53.3.31)

逐次刊行物（学術雑誌、紀要、年報類）

継続受入……749種

	購 入	寄 贈	計
和	54	621	675
洋	48	26	74
計	102	647	749

なお、昭和51年度に第1号館の新築落成に伴い、その第3、4階に新しく図書館設備ができたので、昭和52年3月に移転し、4月4日に開館した。新図書館の総面積は約800㎡。そのうち書庫面積は560㎡、約10約万冊の図書の収納が可能である。閲覧室、事務室のほかに視聴覚室を設け、利用に必要なステレオ装置、マイクロリーダープリンターを備えた。

また、昭和52年度に新設された、日本語教育センターの「日本語教育長期専門研修生」のための図書館利用の規定を定めた。(52.5.18)

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所 在 東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷 地 10,030m²

建 物

第一号館 (延) 5,719m²

(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)

第二号館 (延) 3,015m²

(研究部門)

第三号館 (延) 238m²

(会議室・その他)

第一資料庫 213m²

第二資料庫 (延) 106m²

その他付属建物 (延) 330m²

計 (延) 9,621m²

2 経費

昭和52年度予算額

人件費 300,527,000円

事業費 203,600,000円

各所修繕費 162,000円

II 評議員会(昭和53年3月31日)

会長 有光 次郎

副会長 佐伯 梅友

碧海 純一

石井 庄司

市古 貞次	岩淵悦太郎
岩村 忍	江尻 進
遠藤 嘉基	小川 芳男
何 初彦	坂井 利之
沢田 慶輔	田中千禾夫
千葉雄次郎	徳永 康元
中村 光夫	福島慎太郎
堀 四志男	頼 惟勤

Ⅲ 組織と職員

1 定員 78名

2 組織および職員（昭和53年3月31日現在）

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	林 大	52. 5. 16～53. 3. 31言語体系研究部長事務取扱 52. 11. 15～52. 11. 24国際共同研究及びローマ字表記に関する国際会議のため外国出張（西ドイツ、フランス）
	部 長	荻原 湜	
	課 長	中満 知生	52. 4. 1奈良女子大学に転出
	課 長	正法地幹雄	52. 4. 1福島大学から転入
	課長補佐	国井 和朗	52. 4. 1新居浜工専に転出
	課長補佐 (併)庶務係 長	菊地 貞 # 岡本 まち 荒川佐代子	52. 4. 1昇任
	人事係長	井上 政和	52. 4. 1奈良国立文化財研究所から転入
	併 任	田島 正幸	
	課 長	渡部 新一	
	課長補佐 (併)総務係 長	広瀬 二郎 #	

		金田 とよ	
	経理係長	山本 光夫	
		岩田 茂男	
	用度係長	中村 佐仲	52. 4. 1 東京国立博物館に転出
	用度係長	土佐南洋夫	52. 4. 1 国立近代美術館から転入
		加藤 雅子	
		木村 権治	
		鈴木 亨	
		安藤信太郎	
		浅香 忠雄	
	非 常 勤	小原ちい子	(52. 4. 1～53. 3. 30)
		中山 典子	(52. 4. 1～53. 3. 30)
	図 書 館	大塚 通子	
		塚田 吉彦	
言語体系研究部	部 長	西尾 寅弥	52. 5. 16群馬大学に転出
第一研究室	室 長	高橋 太郎	
		工藤 浩	
		鈴木美都代	
	非 常 勤	鈴木 重幸	53. 2. 6～53. 3. 31 (横浜国立大学教授)
第二研究室	室 長	宮島 達夫	
		村木新次郎	
		高木 翠	
言語行動研究部	部 長	渡辺 友左	53. 3. 15～54. 3. 14言語行動研究部第三研究室長事務取扱
第一研究室	室 長	中村 明	
		杉戸 清樹	
		塚田実知代	
第二研究室	(取)室長	渡辺 友左	
	主任研究官	江川 清	52. 11. 13～52. 12. 4 国際共同研究のため外国出張 (西ドイツ, フランス)

第三研究室	室 長	米田 正人	
		堀江よし子	
		高野美智子	
言語変化研究部	主任研究官	神部 尚武	52. 3. 15～53. 3. 14 文部省在外研究員 (甲種) (米国, カナダ, メキシコ)
		高田 正治	52. 10. 1 昇任
		小原美恵子	53. 3. 15～54. 3. 14 同 (乙種) (主任研究官)
第一研究室	部 長	飯豊 毅一	(52. 4. 1～53. 3. 30)
		佐藤 亮一	
		真田 信治	
第二研究室	室 長	沢木 幹栄	
		白沢 宏枝	
		飛田 良文	
言語教育研究部	主任研究官	梶原滉太郎	
		中山 典子	
		田原 圭子	文献調査室
第一研究室	部 長	伊藤 菊子	文献調査室
		中曽根 仁	文献調査室
		芦沢 節	
言語計量研究部	室 長	村石 昭三	
		大久保 愛	
		岩田 純一	
第一研究室	非常勤	川又瑠璃子	
		福沢 周亮	53. 2. 6～53. 3. 31 (筑波大学助教授)
		斎賀 秀夫	52. 5. 1～53. 3. 31 言語計量研究部第三研究 室長事務取扱
第一研究室	室 長	土屋 信一	
		中野 洋	
		薮岡 昭夫	

第二研究室	非常勤 室長	長田 厚子	
		堀江久美子	
		石綿 敏雄	53.2.6～53.3.31 (茨城大学教授)
		田中 章夫	52.4.1大阪外国語大学に転出
		野村 雅昭	52.5.1言語計量研究部第三研究室長から配置換
第三研究室	(取)室長 主任研究官	佐竹 秀雄	
		大滝 弘美	53.3.31退職
		斎賀 秀夫	
		斎藤 秀紀	
		田中 卓史	
日本語教育 センター 第一研究室	センター長 (取)室長 主任研究官	米田 純子	
		科野 千夏	
		小高 京子	
		沢村都喜江	
		野元 菊雄	52.10.1～53.3.31 日本語教育センター第一研究室長事務取扱
第二研究室	室長	(取)室長 野元 菊雄	
		主任研究官 高田 誠	52.7.2～54.7.1文部省在外研究員(西ドイツ, スペイン, フランス, イタリア, オーストリア)
		志部 昭平	52.11.13～52.12.4 国際共同研究のため外国出張(西ドイツ, フランス)
		上野田鶴子	52.10.1 東京大学医学部音声言語医学研究施設から転入
		水谷 修	52.4.18 日本語教育研究室長から配置換 52.7.27～52.8.8 国際研究集会出席のため外国出張(ハワイ)
日本語教育研修 室	室長	田中 望	
		石井 久雄	
		田島 正幸	
		併任 高野美智子	
		室長 武田 祈	52.4.18 日本語教育センター日本語教育研修室長から配置換
日本語教育教材 開発室	室長	日向 茂男	

3 名誉所員

西尾 実（初代所長 昭24.1.31～35.1.22在任）

岩淵悦太郎（2代所長 昭35.1.22～51.1.16在任）

IV 昭和52年度の事業

1 刊行書

方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―（資料集10）

X線映画資料による母音の発音の研究（報告60）

―フォネーム研究序説―

電子計算機による国語研究IX（報告61）

研究報告集1（報告62）

国語年鑑（昭和52年版，秀英出版刊）

国立国語研究所年報―28―（昭和51年度）

日本語教育参考資料 日本語の文法（上）

日本語教育教材映画指導解説書（基礎篇第1，2，3課）

2 日本語教育映画の制作および普及

今年度制作した日本語教育映画（16ミリ，カラー，5分もの）の題名は下記のとおりである。

第11巻「どちらが すきですか」―比較・程度の表現―

第12巻「もみじが とても きれいでした」―です，でした，でしょう―

第13巻「きょうは あめが ふっています」―して，している，していた―

これらは，北海道，宮城県，愛知県，京都府，大阪府，兵庫県，広島県，福岡県各教育委員会および都立日比谷図書館に寄贈した。なお，これらの映画フィルムは，需要によってビデオ化して頒布することができるようになっていく。

3 国立国語研究所日本語教育センター公開講座（来会者120名）

第1回 日本語教育と国語教育 昭和52年11月26日（土）

第2回 日本語教育の現状，日本語の文字 昭和52年12月3日（土）

第3回 日本語教授の実際，日本語の音声 昭和53年3月4日（土）

第4回 日本語の特質

昭和53年3月11日(土)

4 日本語教育研修会

(89ページ参照)

現職者一般研修および初級研修をそれぞれ東京会場、大阪会場で実施した。

東京会場

会場 国立国語研究所日本語教育センター

日時 昭和52年7月26日(火)～7月30日(土)

大阪会場

会場 大阪府中小企業文化会館

日時 昭和52年8月4日(木)～8月8日(月)

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
Hiroko C. Quackenbush オーストラリア アデレード 大学講師(アメリカ)	(1)オーストラリアにおける日本語教員養成コース実施に備えて国語研究所の教員研修の内容と方法の研究 (2)日本語教員のための外来語リスト作成及び、それに基づく指導法 (3)日本語教員の観点からみた擬態語の問題点	昭和52年12月1日から 昭和53年2月28日まで
イエンス・リックマイヤー ドイツ語研究所研究員	日独語の対照言語学的研究	昭和52年12月から 昭和55年3月31日まで

VI 日記抄

1977. 4.21 ドイツ語研究所 ヨブストマティアス・シュパンナーゲル氏来訪
6. 8 (財)英話教育協議会 英語研究所長 清水護氏他2名来訪
6.13 文化庁附属機関庶務・会計部課長会議(13～14)(文部省)

- 14 国語辞典編集刊行に関する懇談会（国研会議室）
- 16 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（第3部会）（16～17）
（学士会館）
- 17 文部省所轄研究所長会議（東海大学校友会館）
- 18 第28回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会（学士
会館）
- 27 第92回 国立国語研究所評議員会（国研会議室）
- 7. 19 大学入試センター所長 加藤陸奥雄氏他1名来訪
- 26 日本語教育初級・現職者一般研修（26～30）（国研日本語教育センター）
- 8. 4 日本語教育初級・現職者一般研修（4～8）（大阪府立中小企業会館）
- 9. 16 会計検査
- 19 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会世話人会（東
京医科研）
- 27 昭和52年度 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（第3部
会）（27～28）（博多ホテル）
- 10. 11 第28回 文部省所轄機関等事務協議会（11～12）（乗鞍青年の家）
- 18 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会世話人会（東
京工大材料研）
- 22 第28回 文部省所管研究所第3部会事務協議会（22～23）（京都御車
会館）
- 25 秋季文部省所轄研究所長会議（25～26）（分子研）
- 11. 8 第1回 国語辞典編集準備委員会開催（国研会議室）
- 12 農林省農業技術研究所江川所長来所
- 14 愛知県西尾市立米津小学校教諭竹内和子氏他1名見学
- 19 山形県中津川中学校教諭樋口利夫氏他8名見学
- 26 日本語教育公開講座（国研講堂）
- 12. 1 日独対照国際共同研究のため、ドイツ語研究所研究員 イエンス・リ
ックマイヤー氏来所（55.3まで）
- 2 母語別学習教材作成準備委員会開催（国研会議室）
- 3 日本語教育公開講座（国研講堂）

- 20 創立記念日 永年勤続表彰及び祝賀パーティー（講堂・ホール）
- 20 文化庁国語課主催 日本語教育施策調査会（国研会議室）
- 1978. 1. 23 母語別学習教材作成準備委員会（第2回）（国研会議室）
- 2. 13 日本語教育に関する研究連絡のためブラジル洲立サンパウロ大学教授
鈴木梯一氏来所（18日まで）
- 15 日本語教育センター視察のため、行政管理庁 土屋副管理官, 松村主査,
室屋国語課長, 上岡国語課課長補佐来所
- 20 文化庁附属機関次長幹部会議（教育会館）
- 20 衆議院議員 有島重政氏視察
- 21 大蔵省主計局 福田主査, 文化庁山本会計課長, 室屋国語課長他1名
視察
- 22 文化庁給与監査（国研会議室）
- 27 第2回 国語辞典編集準備委員会（国研会議室）
- 3. 2 昭和52年度 日本語教育研究協議会（国研会議室）
- 4 日本語教育公開講座（国研講堂）
- 6 第93回 国立国語研究所評議員会（国研会議室）
- 3. 8 文部政務次官 近藤鉄雄氏, 室屋国語課長ほか1名視察
- 11 日本語教育公開講座（国研講堂）
- 13 文化庁附属機関長会議（文部省会議室）
- 22 成蹊大学教授青木伶子氏ほか9名見学
- 25 日本語教育教材開発に関する打合せ会（国研会議室）
- 27 母語別学習教材作成準備委員会（第3回）（国研会議室）
- 30 日本語教育センター運営委員会（第1回）（国研会議室）

昭和53年9月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘 3—9—14
電話東京 (900) 3111 (代表)

UDC 058 : 809.56

NDC 810.5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞・助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	品切れ
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	180円
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	品切れ
8	談 話 語 の 実 態	〃	〃
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品切れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	〃
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	〃
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円

23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究	〃	〃
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) ——分 析——	〃	〃
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,100円
27	共 通 語 化 の 過 程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類 義 語 の 研 究	〃	〃
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	〃	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	〃	〃
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	〃	〃
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	〃	8,000円
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	〃	9,000円
30-6	日 本 言 語 地 図 (6)	〃	10,000円
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語象と社会構造——	〃	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	〃	5,000円
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	〃	1,300円
38	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅱ)	〃	2,800円
39	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅲ)	〃	700円
40	送 り が な 意 識 の 調 査	〃	1,500円
41	待 遇 表 現 の 実 態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅲ)	〃	1,200円
43	動 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究	〃	5,000円
44	形 容 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究	〃	3,000円

45	幼 児 の 読 み 書 き 能 力	東京書籍刊	4,500円
46	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と何値観——	〃	700円
48	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (IV)	〃	3,000円
49	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (V)	〃	900円
50	幼 児 の 文 構 造 の 発 達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VI)	〃	1,000円
52	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——時間における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言 語 使 用 の 変 遷 (1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
53	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VII)	〃	1,000円
54	幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	1,300円
56	現 代 新 聞 の 漢 字	〃	3,000円
57	比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類	秀英出版刊	6,000円
58	幼 児 の 文 法 能 力	東京書籍刊	5,500円
59	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VIII)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	〃	
61	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IX)	〃	1,300円
62	研 究 報 告 集 (1)	〃	

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	〃	〃
4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	〃	〃
5	沖 縄 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,600円
7	動 詞・形 容 詞 問 題 語 用 例 集	〃	1,700円
8	現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)	〃	500円
9	牛店 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引	〃	1,500円

10 方言談話資料(1) —山形・群馬・長野—

国立国語研究所論集

1	こ	と	ば	の	研	究	秀英出版刊	品切れ
2	こ	と	ば	の	研	究	第2集	750円
3	こ	と	ば	の	研	究	第3集	品切れ
4	こ	と	ば	の	研	究	第4集	1,300円
5	こ	と	ば	の	研	究	第5集	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	16	昭和39年度	品切れ
2	昭和25年度	＃	17	昭和40年度	250円
3	昭和26年度	160円	18	昭和41年度	300円
4	昭和27年度	160円	19	昭和42年度	300円
5	昭和28年度	品切れ	20	昭和43年度	品切れ
6	昭和29年度	200円	21	昭和44年度	＃
7	昭和30年度	品切れ	22	昭和45年度	400円
8	昭和31年度	＃	23	昭和46年度	450円
9	昭和32年度	＃	24	昭和47年度	450円
10	昭和33年度	＃	25	昭和48年度	品切れ
11	昭和34年度	＃	26	昭和49年度	600円
12	昭和35年度	350円	27	昭和50年度	700円
13	昭和36年度	160円	28	昭和51年度	700円
14	昭和37年度	220円	29	昭和52年度	
15	昭和38年度	250円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和37年版	品切れ
昭和30年版	＃	昭和38年版	＃
昭和31年版	＃	昭和39年版	980円
昭和32年版	＃	昭和40年版	1,100円
昭和33年版	＃	昭和41年版	1,100円
昭和34年版	＃	昭和42年版	1,100円
昭和35年版	＃	昭和43年版	品切れ
昭和36年版	800円	昭和44年版	1,500円

昭和 45 年版	1,500円	昭和 50 年版	3,800円
昭和 46 年版	2,000円	昭和 51 年版	4,000円
昭和 47 年版	2,200円	昭和 52 年版	4,500円
昭和 48 年版	2,700円	昭和 53 年版	4,600円
昭和 49 年版	3,800円		

日本語教育教材

1	日本語と日本語教育	国立国語研究所 文化庁共編	大蔵省印刷局刊	650円
	——発音表現編——			
2	日本語と日本語教育	——文字表現編——	〃	850円
3	日本語の文法(上)	——日本語教育指導参考書4——	〃	〃

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会共著 国立国語研究所	金沢書店刊	品切れ

日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー, 5分, 日本シネセル社販売)

券 題 名	プリント価格
第1巻 これはかえます —「こそあど」+「は～です」—	30,000円
第2巻 さいふはどこにありますか —「こそあど」+「が～ある」—	〃
第3巻 やすくないです, たかいです —形容詞とその活用導入—	〃
第4巻 なにをしましたか —動 詞—	〃
第5巻 しずかなこうえんで —形容動詞—	〃
第6巻 さあ, かぞえましょう —助 数 詞—	〃
第7巻 うつくしいさらになりました —「なる」「する」—	〃
第8巻 きりんはどこにいますか —「いる」「ある」—	〃
第9巻 かまくらをあるきます —移動の表現—	〃
第10巻 おかねをとられました —受身の表現1—	〃
第11巻 どちらがすごいですか —比較・程度の表現—	〃
第12巻 もみじがとてもきれいでした —「です」「でした」「でしょう」—	〃
第13巻 きょうはあめがふっています —「して」「している」「していた」—	〃

(第1巻～第3巻は, 文化庁との共同企画・VTR価格1/2 インチオーブンリール

21,000円, 3/4 インチカセット 20,000円)

1977—1978
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1977 to March 1978

The Descriptive Study of Modern Japanese Grammar

A General Survey of Modern Japanese Vocabulary

A Sociolinguistic Study on Japanese Honorifics

A Stylistic Study of Modern Japanese

Comparative Study on the Variations of Language Behavior Between
Various Social Groups

Fundamental Study for Analysis of Verbal Behavior System

Study on the Physiological Process Pronunciation

A Nation-Wide Survey of the Phonetic and Grammatical Features of
the Dialects

Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji Period

Study on the Relation Between Acquisition of Word Meaning and
Cognitive Development in Children

Statistical Investigation of High School Textbook Vocabulary

Research on the Actual Condition of Writing-Form Variation and the
Mental Attitude of Writers in Modern Japanese

A Basic Study for the Description of Modern Japanese Characters and
Writing System

The Analytic Study of Language Data by Computer

Contrastive Linguistic Study of Japanese

A Contrastive Study of Patterns in Japanese Language Behavior

A Study of Fundamental Vocabulary for Japanese Language Teaching

A Study of the Current State of Japanese Language Teaching

—Contents and Methodology—

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO